

十分杯で長岡を 盛り上げよう!

—十分杯を、地域から愛される
“問題児”に!?!—

平成28年度 学生による地域活性化プログラム

権五景ゼミナール 活動報告書



ごあいさつ



長岡大学 学長 村山 光博

長岡大学の「学生による地域活性化プログラム」は、平成 19 年度に文部科学省の現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)に採択された「学生による地域活性化提案プログラム 一政策対応型専門人材の育成」に始まり、今年度で 10 年を迎えることができました。これまで長きにわたりこの取り組みを続けて来られたのは、地域の皆様の暖かいご支援とご指導の賜物と、深く感謝しております。まだ十分には地域の活性化に貢献しているとは言えませんが、このプログラムの取り組みを始めた 10 年前と比較すると、周辺地域における「学生による地域活性化プログラム」の認知度は明らかに高まってきていると感じております。これまで本プログラムの運営において積極的にご協力をいただいていた地域連携アドバイザーだけでなく、たくさんの地域の方々からも本プログラムの個々の取り組みテーマに対するお問い合わせや称賛の声をいただいております。また、これらの学生の取り組みに関して、新聞やテレビなどのマスメディアでも大きく取り上げていただくことが多くなりました。

長岡大学の建学の精神は、

- ・ 幅広い職業人としての人づくりと実学実践教育の推進
- ・ 地域社会に貢献し得る人材の育成

です。本プログラムは、まさにこの精神を実現するための本学の中心となる教育プログラムであると言えます。

「地域活性化とは何か」という問いに対する明確な答えは無いと思いますが、本プログラムでは、答えの無い課題に対して、どのように考え、どのように行動して行くのかを学生が自ら試行錯誤しながら体得していくことができます。大学を卒業して地域社会の一員となる学生たちが、これからの地域が抱える課題に積極的に取り組んでいくことを期待されることを考えると、彼らにとってこれらの体験は貴重なものとなると思います。

本プログラムでは、各ゼミナールでテーマを設定し、ゼミに所属する学生のグループが活動を進めて行くことになりますが、時には学生同士の意見の食い違いや、ちょっとしたすれ違いが起きることもあります。このような体験も学生がさらに一回り成長する要素となります。ゼミで決めた研究テーマをまとめ上げるために、どのように他者とかかわりながら取り組みを進めて行くべきなのか、この取り組みの中で自分の役割は何であるのか、などを考えながら活動を行っていくことで、チームで活動することの難しさだけでなく、チームで何かをやり遂げたことの充実感や達成感を味わうことができます。

長岡大学の「学生による地域活性化プログラム」では、学生が地域の皆様と一緒に汗をかき、考え、そして楽しむことで、目先の地域貢献活動だけでなく、将来にわたって地域の活性化を担っていける人材の育成を目指しております。

地域の皆様には、日頃より本プログラムへの多大なるご支援とご協力をいただき、誠にありがとうございます。

平成 29 年 3 月

はじめに

十分杯で長岡を盛り上げよう！ —十分杯を、地域から愛される“問題児”に！？—



長岡大学准教授／ゼミ担当教員 権 五景（樂九）

権ゼミでは、2011 年度から十分杯の広報活動をしてきました。

1 年目は、地元の若者が地元の歴史を学び、それを知らせていこうとする活動ということで、テレビや新聞の取材を受けました。初めての体験で、学生たちも小生もわくわくした記憶がございます。そして、活動の目標は十分杯の認知度を高めることに設定しました。また、活動開始にあたって、からくりの仕組みをわかりやすく伝えるためにオリジナルの紙コップ十分杯を製作して広報活動で配布しました。月 1 回ほどアオーレ長岡で暑い日も寒い日も活動を行いました。2 年目は、認知度の低さがそもそも問題でしたが、どれだけ低いかを確認しようではないかということで、長岡駅周辺でアンケート調査を行いました。また、秋にアオーレで開催された酒の陣という大きなイベントに十分杯専用の立派なブースを長岡市が用意してくださり、私たちも力が入りました。3 年目は、主に、十分杯が長岡に初めて入った当時の経済・社会状況はどのようなものだったかについて、文献研究を行いました。また、50 点ほどで数は少ないですが、それでもおそらく世界一多い十分杯のコレクションを学食の脇のショーケースに展示しました。4 年目は、着実にやってきたお蔭で、それなりの収穫がございました。第 1 に、昨年に引き続き綿密な文献研究を行いました、多くのことがわかりました。それを年表という形にすることができました。第 2 に、地域の関係者と意見交換をはかる目的で「十分杯会議」を初めて開催しました。非常に意義深い会議でした。第 3 に、同会議で提案した、観光列車「越乃シュクラ」と十分杯のコラボレーションのアイデアが実現できました。また、「満つれば欠く」という教訓についても深く勉強することができました。そして、私ごとで恐縮ですが、その教訓から学んだ証として、十ではなく、「九」を楽しみながら生きていくということで新たに「樂九」という雅号を作りました。5 年目の昨年度は大きく前進した 1 年でした。4 年間続けてきた街頭広報活動は行いませんでしたが、11 回行った JR 観光列車「越乃シュクラ」での広報活動の効果は実に大きかったです。また、十分杯に関する理解を深めてもらうための小冊子を作成しましたが、これも非常に好評を得ることができました。2 回目の十分杯会議も非常に有意義でした。そこでは、関係機関に 13 の提案（一例として、ふるさと納税の返礼品として十分杯の活用）を行いました。

6 年目の今年度はこれまでで最も広報活動の成果が出た年でした。春には長岡まちなかキャンパスで十分杯講座とアイデア会議（第 3 回十分杯会議）を行いました。また、昨年度までアドバイザーをしてくださった太刀川喜三様より 30 年ほど集めて来られた十分杯を寄贈していただきました。お陰様で本学の十分杯コレクションは世界一の規模となりました。夏には学生たちだけで在日米国大使館と慶応大学が開いた起業セミナーに参加し、今後のゼミの方向性について真剣に考えるようになりました。秋には第四銀行と新潟三越伊勢丹共催のビジネスコンテストにおいて第四銀行特別賞を受賞しました。冬には新潟県異業種交流センター主催の地域活性化大賞において奨励賞を受賞しました。また、今年から渡辺茂様にアドバイザーになっていただきました。とても奇抜で斬新なアイデアをお持ちで、今後の活動において大いに教えていただきたいと思います。

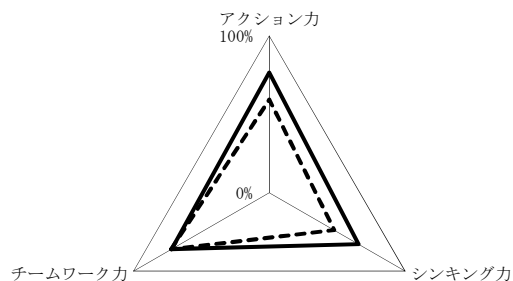
最後に、アドバイザーの二方、権ゼミの卒業生の皆さん、十分杯会議に来てくださった皆様、長岡コンベンション協会の皆様、ゼミ活動を大々的に取りあげてくださったマスコミの皆様、酒の陣で立派なブースを用意してくださる長岡市の皆様、そして、私どもの活動をバックアップしてくださる本学の事務方の皆様にこの紙面を借りて深く感謝申し上げます。

平成 29 年 3 月

平成 28 年度 学生による地域活性化プログラム 社会人基礎力の上昇度

地域活性化プログラムにおける学生教育の目標は、社会人基礎力の向上、ビジネス展開能力の向上、専門的スキルの向上が目的である。平成 28 年度学生による地域活性化プログラムに参加した 8 取組の学生の「社会人基礎力」の伸び具合について、学生とゼミ担当教員にアンケートを実施した。アンケートは取組に参加した学生一人一人を対象に、社会人基礎力の変化を評価する形で実施した。学生は自己評価（有効回収 64）であり、教員は各ゼミ生についての評価である。

＜社会人基礎力＞の上昇度



★「社会人基礎力」

＝「アクション力」「シンキング力」「チームワーク力」が上昇

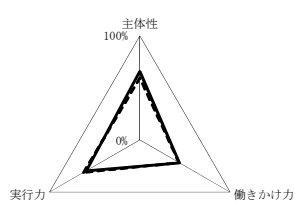
3 つの社会人基礎力の上昇度（取組前と取組後の比較）は、学生の自己評価と教員評価の間に乖離がある。学生の評価が高いのがアクション力で、地域活性化プログラムの取り組みの中で、学生が自分なりに挑戦している姿勢がうかがえる。

今後の取組においては、今年度の結果に現れている学生評価と教員評価の差を小さくすると同時に全体的な上昇度を高めていくことに対して、継続的に検討していく必要がある。

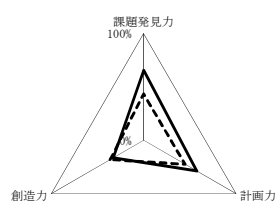
＜社会人基礎力＞の上昇度

| | 学生評価 | 教員評価 |
|--------|--------|--------|
| アクション力 | 76. 6% | 59. 4% |
| シンキング力 | 65. 6% | 47. 8% |
| チームワーク | 71. 9% | 72. 1% |

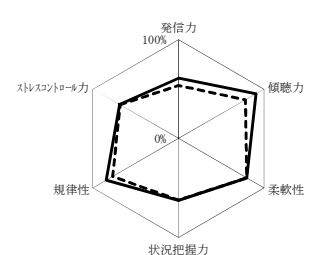
＜アクション力＞の評価



＜シンキング力＞の評価



＜チームワーク力＞の評価



| | 学生評価 | 教員評価 |
|-------|--------|--------|
| 主体性 | 65. 6% | 59. 4% |
| 働きかけ力 | 43. 8% | 43. 5% |
| 実行力 | 59. 4% | 62. 3% |

＜アクション力＞

アクション力の 3 つの指標を比較すると、主体的には取り組めたと思っている学生の割合は高いが、教員の評価は低くなっている。

学生はそれなりに積極的に活動を行っていると感じている一方で、教員は、もう一歩踏み出してほしいという期待感を持っているようである。

| | 学生評価 | 教員評価 |
|-------|--------|--------|
| 課題発見力 | 65. 6% | 43. 5% |
| 計画力 | 57. 8% | 44. 9% |
| 創造力 | 32. 8% | 36. 2% |

＜シンキング力＞

学生の自己評価では、課題は見つけられたが、自分で計画して課題に立ち向かい、課題解決ができた学生は少なく、また創造力が極端に低くなっている。また、教員評価でも創造力については厳しいものになっている。昨年同様、シンキング力が弱い傾向があり、この点をどのようにして伸ばしていくかが課題として残った形である。

| | 学生評価 | 教員評価 |
|-------------|--------|--------|
| 発信力 | 60. 9% | 53. 6% |
| 傾聴力 | 90. 6% | 78. 3% |
| 柔軟性 | 79. 7% | 79. 7% |
| 状況把握力 | 62. 5% | 62. 3% |
| 規律性 | 84. 4% | 76. 8% |
| ストレスコントロール力 | 68. 8% | 68. 1% |

＜チームワーク力＞

チームワーク力は、「アクション力」や「シンキング力」よりも学生評価と教員評価の類似性が高い。

学生の自己評価も同様であるが、教員の評価が発信力と状況把握力が低い点は、今後指導を強めていく必要がある。

平成28年度 学生による地域活性化プログラム

権 五景
ゼミナール

十分杯で長岡を盛り上げよう！

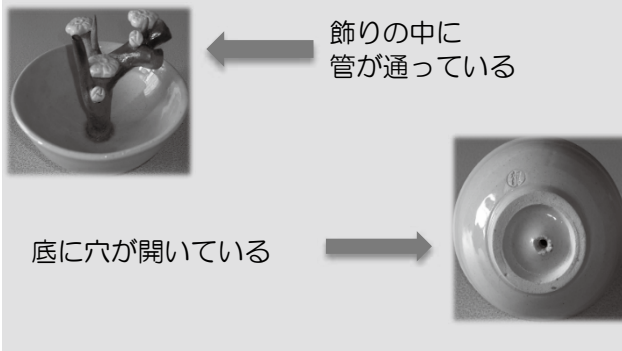


【参加学生】 4 年生 中澤司
3 年生 大滝皓史 小布山大喜 早川裕章
周 天奇
2 年生 佐野毅 水落柊哉

【アドバイザー】 長岡歯車資料館 館長 内山 弘氏
長岡市青少年育成センター 所長 渡辺 茂氏

ほかの杯と大きく異なる4つの点

- ① 杯なのに底に穴がある。
- ② 杯の中に「飾り」という突起がある。
- ③ 飾りの中は管が通っている。
- ④ この杯に一定の量(8分目程度)を超えて注ぐと中に入っていたすべてのお酒が底の穴から漏れてしまう。



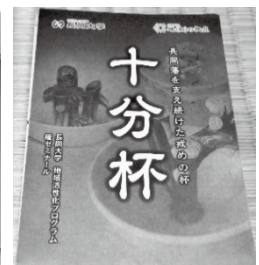
長岡と十分杯の関わり

長岡藩と十分杯の出会いは三代藩主牧野忠辰公(まきのただとき 1665-1722)の時代にまで遡ります。

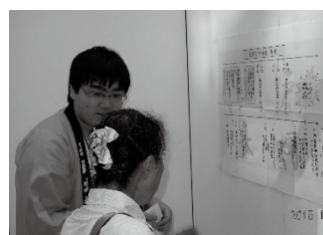
忠辰公以前からも武士は簡素な生活を旨としていました。ところが、元禄時代(1688-1704 年)になると貨幣経済が発展し、戦国期の苦しい時代から民衆も生活水準が向上し、生活必需品以外を購入する余裕もでき、町人の生活が奢侈化するにつれて武士たちも同調し華やかな生活をするようになりました。

長岡藩も例外ではなかったのですが、高田城二の丸請収のための出費、度重なる水害で藩の財政が悪くなっていました。そこに、塚越という領民(おそらく庄屋)の持参した十分杯に忠辰公が感銘を受けて詩を詠み、処世訓としたことから長岡に十分杯が知られることになりました。忠辰公は、十分杯が持つ「満つれば欠く」という処世訓を藩士に示すことで、財政を引き締める一方で、武士としての戒めを大事にしたと思われます。

まちキャン
十分杯講座
での活動風景



酒の陣と観光列車
越乃 Shu * Kura
での活動風景



十分杯で長岡を盛り上げよう！

—十分杯を、地域から愛される“問題児”に！？—

權ゼミナール

| | | | | |
|-----|--------|-------|--------|--------|
| 4 年 | 13M022 | 中澤 司 | | |
| 3 年 | 14K017 | 大滝 皓史 | 14K037 | 小布山 大喜 |
| | 14K069 | 早川 裕章 | 14K405 | 周 天奇 |
| 2 年 | 15K056 | 佐野 毅 | 15K096 | 水落 柊哉 |

目 次

| | |
|-----------------------------------------------------------|----|
| 1. 序章—なぜ、この活動をするのか…………… | 1 |
| 1.1 権ゼミの基本姿勢 ～なぜ地域資源に着目するのか～…………… | 1 |
| 1.2 活動の意義と十分杯の位置付け…………… | 1 |
| 1.3 活動のモデルと具体的な方針…………… | 5 |
| 2. 今年度の活動紹介と成果…………… | 6 |
| 2.1 昨年度までの活動…………… | 6 |
| 2.1.1 過去5年間の概略 | |
| 2.1.2 昨年の提案事項の経過 | |
| 2.2 今年度の活動 —広報活動— …… | 10 |
| 2.2.1 「越乃 Shu*Kura」車内でのイベントの継続 | |
| 2.2.2 「長岡酒の陣」への参加 | |
| 2.2.3 「長岡まちゼミ」への参加（2年目） | |
| 2.2.4 「まちなかキャンパス長岡」での市民プロデュース講座の実施 | |
| 2.2.5 「ながおかバル街」への参加 | |
| 2.2.6 悠久祭での活動 | |
| 2.2.7 Facebook の開始 | |
| 2.2.8 「高野邸」での広報活動 | |
| 2.2.9 「県立歴史博物館」での展示 | |
| 2.2.10 メディア出演 | |
| 2.2.11 太刀川喜三様よりの十分杯寄贈 | |
| 2.2.12 「長岡イノベーションカレンダー」制作協力 | |
| 2.2.13 十分杯の自作 | |
| 2.2.14 「公道杯」についての研究 | |
| 2.2.15 ホテルメッツ長岡の「十分杯宿泊プラン」 | |
| 2.3 今年度の活動 —企画・提案活動— …… | 25 |
| 2.3.1 「たいこうビジネスプランコンテスト」および 「NAZE ドリームプロジェクト」への応募 | |
| 2.3.2 「NIIGATA ビジネスアイデアコンテスト」への応募 (および、その前段としてのセミナー参加) | |
| 3. 提案事項 …… | 29 |
| 3.1 「NIIGATA ビジネスアイデアコンテスト」での提案事項 …… | 29 |
| 3.1.1 「メッセージ入り十分杯の製作」 | |
| 3.1.2 「イベントの企画・提案」 | |
| 3.1.3 「十分杯の製作を企画・提案する」 | |
| 3.2 その他のアイデア…………… | 32 |
| 3.2.1 十分杯クリアファイル・十分杯エコバッグなどの関連商品 | |
| 3.2.2 3Dプリンターによる十分杯作成 | |
| 3.2.3 十分杯にちなんだ銘柄を作る | |
| 4. 次年度以降への課題…………… | 33 |
| 5. 結びに代えて…………… | 34 |

【補論】

| | | |
|------------|---------------------------------------------------------------|----|
| 補論. 1 | 十分杯入門..... | 36 |
| 補. 1. 1 | 4 つの特徴 | |
| 補. 1. 2 | 教訓 | |
| 補. 1. 2. 1 | 『十分盃銘』の中の「天道 ^{てんどう} 虧 ^き 盈 ^{えい} 」 | |
| 補. 1. 2. 2 | 様々な「足るを知る」と「満つれば欠く」と歴史 | |
| 補. 1. 3 | 杯の構造と原理 | |
| 補. 1. 4 | 十分杯という名称 | |
| 補. 1. 5 | 長岡と十分杯の関わり | |
| 補. 1. 5. 1 | 江戸時代 | |
| 補. 1. 5. 2 | 明治時代以降 | |
| 補論. 2 | 日本酒チャートづくり..... | 45 |
| 補論. 3 | 十分杯の広報活動用 新・はっぴづくり..... | 46 |

参考文献

参考ウェブサイト

1. 序章-なぜ、この活動をするのか

1.1 権ゼミの基本姿勢 ～なぜ地域資源に着目するのか～

権ゼミの理論的命題は「経済発展は地理的特性から離れることはできない」である。つまり、当該地域の地理的特性をうまく活用することで経済発展が可能となると考えている。私たちが地域資源に着目している理由として、まず、表1を確認されたい。この表は右側に長岡の現在の産業を示し、左側にはそれぞれの産業の発展の元になった地域資源・できごとを示している。例えば現在の長岡は、機械工業の集積地となっている。これについて、元をたどると、当地の油田における石油掘削機械の製造・修理の過程で、技術が培われてきたという背景がある¹。また、長岡を創業の地とする北越製紙(現:北越紀州製紙)は当初、市内の城岡地域にて稲わらを用いて紙を生産していた²。他にも、大雪(水資源)や稲作に由来する、日本酒・発酵食品(醸造業)などの事例がある。

地域資源の活用について国家レベルで見ると、産業化初期における欧米諸国の地下資源を活用してのエネルギー源獲得と製鉄業の振興や、スイスにおけるミルクチョコレート産業にその一例を見ることができる。

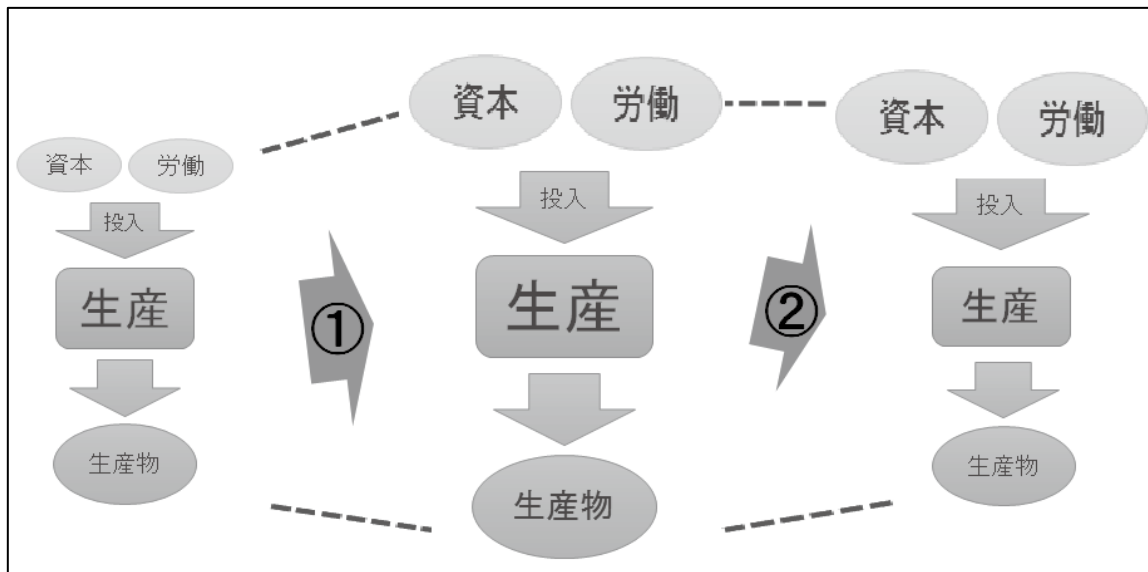
<表1>長岡の産業・現在とそのルーツ

| 地域資源・きっかけ | | 産業・現在 |
|-------------|---|----------------------------|
| 石油 | ⇒ | 機械工業 |
| | ⇒ | 金融業 |
| 稲作 | ⇒ | 製紙業 |
| | ⇒ | 米菓製造 |
| | ⇒ | 日本酒 |
| 大雪(水資源) | ⇒ | 日本酒 |
| 空襲(戦災からの復興) | ⇒ | 花火・まつり(観光業) |
| 十分杯 | ⇒ | おみやげ・イベントなど 観光業 |

1.2 活動の意義と十分杯の位置付け

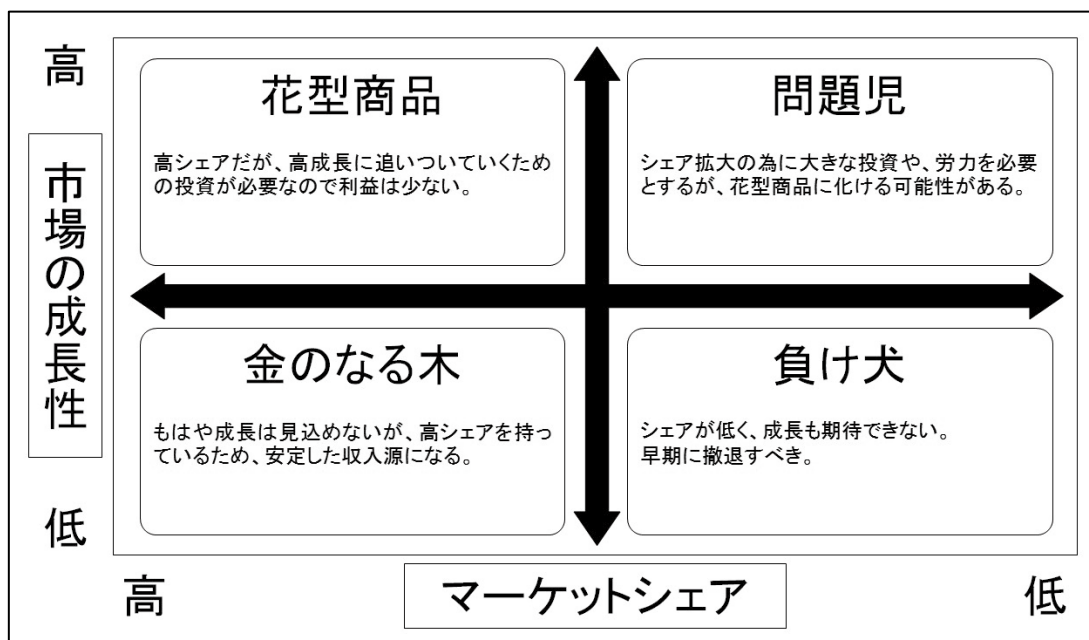
次に活動の意義についての見解を紹介する。図1を参照されたい。経済学において一般的に、資本や労働などの生産要素の投入量を増加させると、その結果の生産物も増加する。しかし、それは無限に続くのではなく、多くの場合投資の規模に対して収穫が逓減するため、いずれ頭打ちとなり、やがては減少へと向かう。このことから、プロダクトライフサイクルにおいて矢印①のような成長期には既存産業を成長させるための投資が重要になり、矢印②のような成熟・衰退期には新産業育成・開拓のための投資が重要になるのである。この考え方は、ボストンコンサルティンググループ(BCG)が企業を対象として考案したものであるが、私たちは、地域を対象とする場合にも有効だと考えている。

＜図 1＞成長期と成熟期



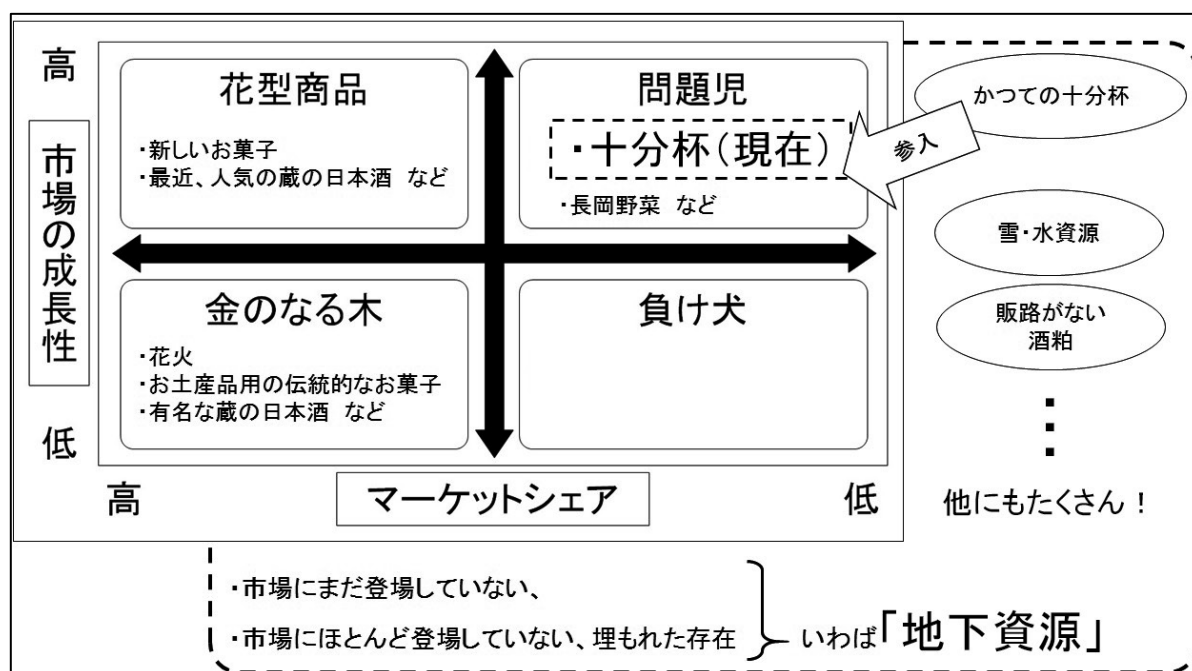
また、プロダクトポートフォリオマネジメント（図 2）の視点から見ると、十分杯をはじめとする「地域資源」は、「問題児」に該当すると考えられるが、それだけでは不十分である。確かに地域資源は、他所にはない独自性や強力な個性を持ち、市場の成長可能性には満ち溢れている。しかし、そもそも知名度が低いため地域の中に埋没しており、ほとんどあるいは全く「市場に登場していない」のが現状ではなかろうか。この視点から、長岡における地域資源の一部を、図 3 にまとめた。

＜図 2＞プロダクトポートフォリオ



（出所）「京都府中小企業診断士会 Web ページ」を参考に作成。

＜図 3＞ 權ゼミが考える、長岡版プロダクトポートフォリオ



長岡では、花火や、お土産品として既に高い知名度・人気を持つ商品が金のなる木であると考えられる。多くの人が長岡の定番商品として買い求めるものである。それに対して、最近登場したお菓子や、インターネットで話題の酒蔵などは、花型商品と言えよう。定番商品になれるか、今が勝負時である。そして、「問題児」である。この分析ではこの象限が最も重要である。なぜなら、市場の成長性が高いため、上手くいけば将来の花形商品、金のなる木の原型になり得るためである。ここに該当する地域資源はとして、現在の十分杯や長岡野菜があると考えている。

ここまでは通常のプロダクトポートフォリオと何ら変わりはない。しかし、私たちはこの4象限に分類することができない地域資源が存在すると考えている。それは、先述したような知名度が低く、市場に全く、あるいはほとんど登場していない、埋もれた地域資源たちであり、彼らを仮に「地下資源」と名付けたい。長岡では、雪・水資源や販路を持たない（廃棄物扱いの）酒粕などがこれにあたると見ている。また、当然のことだが、埋もれているわけだから、私たちの知らないものもまだまだたくさんあるはずである。

地域活性化に取り組んでいる私たちの役目は、この地下資源を掘り起こし、問題児として市場にデビューさせることである。かつての十分杯は、まさに地下資源であった。それを、歯車資料館の内山様が掘り起こし、郷土史家のネットワークを通じてPRしてきた。私たちもそれに賛同し、ゼミ活動を通じて、市民、コンベンション協会、民間企業、行政にPRしてきた。その途上で、十分杯を販売する企業が現れたり、イベントに活用する事例ができたりして、十分杯は徐々に「問題児」へと進化していった。私たちはこの流れを、他の地下資源にも適用できるものだと考えている。

しかし、残念なことに、私たちは既存産業をさらに発展させるための資本や労働は提供できないし、新産業を生み出すための技術もない。そこで、私たちは「知恵」と「汗」を出したい。具体的には、1. 十分杯を「埋もれていた地域資源」として再認識し、長岡にお

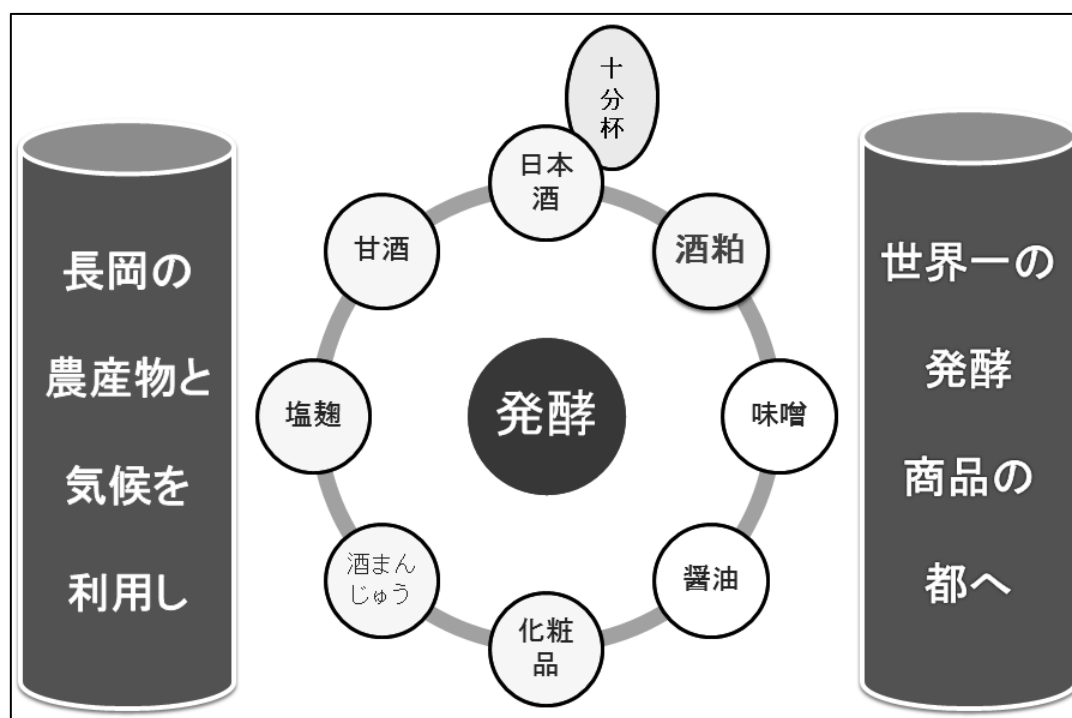
ける新たな生産要素として活用すること。2. 企業や地域に提案を行い、新しい産業あるいは市場を芽吹かせることの2点を「知恵」と捉えている。

続いて、私たちの考える地域資源としての十分杯の位置づけについて触れたい。先述のように、私たちは経済が発展している地域や国は、基本的に地域資源の活用已成功しているところだと考えている。無から有ではなく、あるものを活用していく中で経済は発展していくとすると、長岡は100年以上の歴史がある機械産業と米菓産業を除けば、地域資源を生かして発展をしている分野は少ないのではないだろうか。新潟県は日本有数の農業地帯であり、長岡市もその内多くの面積を占めている。とは言うものの、欧米先進国の農業が他の産業と密接に関わっているのに対し、日本の農業は他産業との関係性が低く、高付加価値の実現には至っていない。その理由として、農業が役割を果たしていないというよりは、それを活用するための工夫が足りないように見受けられる。長岡は米や大豆を活用した発酵食品の宝庫であるが、「発酵食品の街」というイメージは強くない。

また、バイオ産業と発酵は関連が深いはずであるが、今のところ市内のバイオ関連企業の話を目にするにはあまりない。なお、Web 検索にて確認したところ、長岡市内でバイオガス発電などを行う「株式会社 長岡バイオキューブ」以外に目立った話題は見つからなかった。私たちは長岡の農産物を発酵食品に加工することで付加価値を高め、その過程での技術を生かし、将来的に長岡が発酵産業の拠点になることを期待している。

話が非常に大きくなったが、現在の長岡の発酵食品の中核とも言える「日本酒」を、これまで以上に盛り立てる脇役として十分杯を位置付け（図4）、活動している。

＜図4＞十分杯の位置づけ

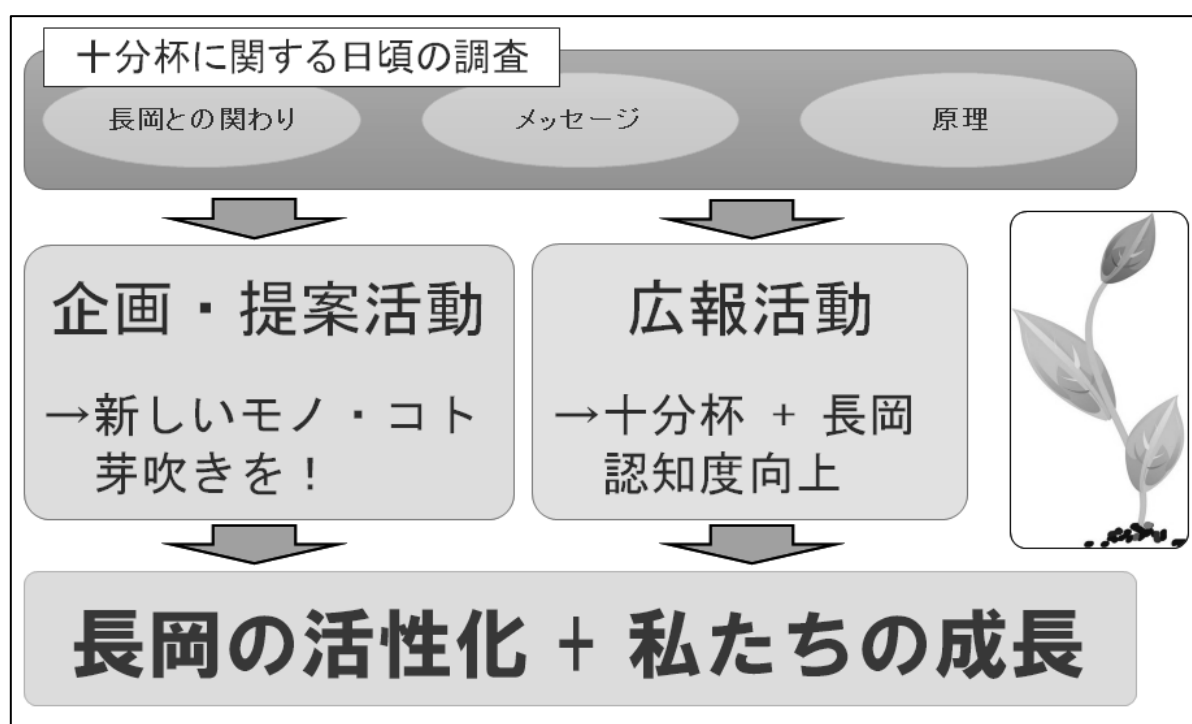


1.3 活動のモデルと具体的な方針

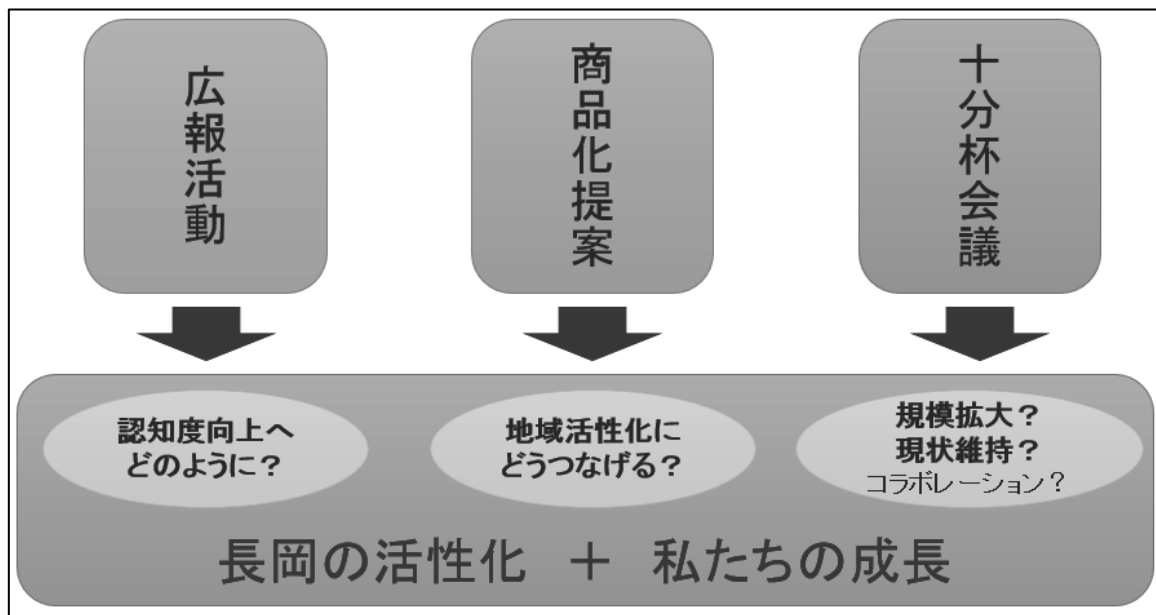
続いて、活動の方針について紹介する。図5は私たちの取り組みのモデルである。取り組みの基礎となるのは、十分杯についての「長岡との関わり」「メッセージ」「原理」の3点からの調査である。そして、その先は2本の柱から成る。1本目は、調査結果を広報することで認知度を向上させるという「広報活動」である。2本目は、調査結果をどのように地域活性化に結び付けるかを考え、企業や地域へ提案していく「提案活動」である。これらを、活動のモデル≒基本姿勢としている。

図6にはより具体的な活動方針を示す。なお、調査活動は継続的に取り組むため、ここでは除外している。活動の基本は、大まかには3点で、①広報活動、②商品化提案、③十分杯会議である。広報活動においてはさらなる認知度向上を目指し、考えを深め行動を起こしていく。商品化提案においては、その提案や商品を地域活性化にどうつなげていくのかを深く突き詰めていきたい。そして、十分杯会議に関しては、今後の方向性や議題、運営主体、規模などについて議論の余地がある。そして、これらのことを地域の皆さまからの助言をいただきながら、考え、提案することで、長岡地域の活性化を目指したい。また、これらの貴重な経験を通じて、ゼミ生自身が成長することも大きな目標としている。

<図5> 取り組みのモデル



<図 6> 具体的な活動方針



2. 今年度の活動紹介と成果

2.1 昨年度までの活動

2.1.1 過去5年間の概略

権ゼミでは、2011年度から十分杯の広報活動を行ってきた。そのきっかけを紹介したい。権ゼミでは、もともと企業見学を通して現実経済や経営に対する理解を深めることを目標としており、ある時、長岡の工業の成り立ちを学ぶため、長岡歯車資料館を見学し、その帰りに十分杯に遭遇した。当時のゼミ生がそのからくりとメッセージに惹かれたことが始まりであった。その後、昨年度までゼミのアドバイザーを務めてくださった太刀川喜三氏が長岡市民センターにて開催された十分杯展示会に偶然足を運ぶことになった。その後、十分杯についての講演会があることを知り、その時の講師が、現在も権ゼミのアドバイザーを務めてくださり、何と以前の見学先だった長岡歯車資料館長の内山弘氏であった。その講演会に参加して以来、権ゼミでは十分杯に積極的に関わるようになり、活動を始めた。

1年目（2011年度）は、地元の若者が地元の歴史を学び、それを知らせていこうとする活動ということで、テレビや新聞の取材を受けた。初めての体験で、多くのゼミ生がわくわくしていた。そして、活動の目標は十分杯の認知度を高めることに設定した。また、活動開始にあたって、からくりの仕組みをわかりやすく伝えるためにオリジナルの紙コップ十分杯を製作して広報活動で配布した。毎月1回ほど、アオーレ長岡で暑い日も寒い日も活動を行った。

2年目（2012年度）は、認知度の低さがそもそもの問題であったが、どれだけ低いかを確認したいと考え、長岡駅周辺でアンケート調査を行った。また、秋にアオーレで開催された「ながおか酒の陣」という大きなイベントに十分杯専用の立派なブースを長岡市が用意してくださり、認知度上昇にも効果があった。

3 年目（2013 年度）は、主に十分杯が長岡に初めて入った当時の経済・社会状況はどのようなものだったかについて、文献研究を行った。また、50 点ほどで数は少ないが、それでもおそらく世界一多い十分杯のコレクションを学生食堂の脇のショーケースに展示した。なおこれは、太刀川喜三氏、内山弘氏、邱跃長岡大学准教授のご好意・ご協力によって実現したものであり、この場を借りて深く御礼申し上げる次第である。

4 年目（2014 年度）は、着実にやってきたおかげで、それなりの収穫をすることができた。第 1 に、昨年に引き続き綿密な文献研究を行った結果、多くのことが判明し、それを年表という形にすることができた。第 2 に、地域の関係者と意見交換をはかる目的で「十分杯会議」を初めて開催した。非常に意義深い会議であった。第 3 に、同会議で提案した、観光列車「越乃 Shu*Kura（シュクラ）」と十分杯のコラボレーションのアイデアを実現することができた。また、‘満つれば欠く’という教訓についても深く勉強することができた。

5 年目（2015 年度）は大きく前進した 1 年であった。4 年間続けてきた街頭広報活動は行わなかったが、計 11 回のシュクラでの広報活動の効果は実に大きかったと感じている。また、十分杯に関する理解を深めてもらうための小冊子を作成したが、これも非常に好評を得ることができた。2 回目の十分杯会議も非常に有意義であった。そこでは、関係機関に 13 の提案（一例として、ふるさと納税の返礼品として十分杯の活用）を行った。

2.1.2 昨年度の提案事項の経過

次に、昨年度の活動の中で私たちが提案した事項がどの程度実現したかを確認する。なお、本項目で取り上げる提案事項は、第 2 回十分杯会議（平成 27 年 10 月開催）及び地域活性化成果発表会（平成 27 年 12 月）にて提案したことである。十分杯会議の目的・意義については、平成 27 年度の活動報告書に詳しく述べてあるので参照されたい。

提案事項とそれぞれの経過は、＜表 2＞に示し、一部については詳細を後述する。

<表 2> 第 2 回十分杯会議及び地域活性化発表会での提案事項と現状

| 主な意見・提案 | | 評価 | 結果・現状 |
|---------|----------------------------|----|------------------------------------------------------------------|
| ① | ふるさと納税の返礼品の一つに加える | ○ | 詳細は後述する。 |
| ② | 大きな十分杯を設置 | ○ | 巨大十分杯（図 7 参照）の製作はされたが、設置場所は未定。 |
| ③ | 観光列車越乃 Shu*kura の土産物（限定品）に | △ | 詳細は後述する。 |
| ④ | 十分杯陶芸教室の復活 | △ | 詳細は後述する。 |
| ⑤ | 十分杯という銘柄のお酒 | △ | 全国の事例調査を行った。 酒蔵関係者によると、「十分杯自体の認知度がさほど高くないため、現状では踏み込みにくい」とのこと。 |
| ⑥ | 十分杯で酒蔵ツアー | △ | 実現に向けて調査・検討中。 ただし、観光業は許認可業でありハードルは高い。（第 3 章参照） |
| ⑦ | 干支の十分杯 | △ | 市内企業と検討中。 |
| ⑧ | 十分杯を盛り込んだカルタ作り | × | 手つかずのまま。 |
| ⑨ | 十分杯通帳作り | × | 手つかずのまま。 銀行関係者によると、「デザインの著作権と使用期間があるため、直ちに變更できない」とのこと。 |
| ⑩ | 日本酒乾杯条例とマッチする十分杯作り | × | 長岡の土産品としての十分杯の製作には取り掛かっている。 |
| ⑪ | 長岡市指定文化財への登録 | × | 詳細は後述する。 |
| ⑫ | 「杯サミット」の開催 | × | 手つかずのまま。 何名か賛同者はいる。 |
| ⑬ | 長岡酒の陣での「川柳大会」の開催 | × | 手つかずのまま。 |

①のふるさと納税の返礼品への活用については、今年度半ばより長岡市の 1 万円以上の寄付を対象とする返礼品ラインナップに十分杯が加わっている。これは、市内の十分杯販売店が申請し認められたものであり、間接的に私たちの提案が実現されたと言えよう。なお、十分杯は『月間新潟 Komachi 編集部が選んだ、長岡ふるさと納税おすすめ品ベスト 5』（<http://na-nagaoka.jp/nagaoka/3430>, 2017. 1. 22 10:11 時点）にて、食品以外の品ベスト 5 に紹介されている。

③の越乃 Shu*Kura 車内での十分杯の販売については、JR 関係者から「申請して認められれば販売はできるかもしれない」「列車の運行と車内販売は別会社なので、手数料負担は

店頭販売より大きくなってしまおう」などの指摘を頂いている。このことから、現状では直ちに車内販売を実現できる可能性は低いと言わざるを得ない。しかし、後述する十分杯の自作（第3章参照）などで販売価格の低下や原価の引き下げを実現できれば、まだチャンスはあるとみて今後も検討を続けていきたい。

④の十分杯陶芸教室については、具体的に決まっていることはない。しかし、後述するまちなかキャンパスながおかでの十分杯講座の終了後に「今度は、“まちなか大学”という5回連続の講座枠を使って十分杯でやってみないか」との打診があった。私たちは、その枠内に作陶体験も盛り込めればよいと考え、アドバイザーや関係者との協議・調査を進めている。

⑪の文化財登録に関しては、関係部署に相談に出向いたところ、「年代を明確に証明できる木箱（多くの陶器は箱やふたに裏書があるため）などの証拠品がないため困難だ」との回答を得た。しかし、牧野忠篤直筆の掛け軸などが残存しており、それらが間接的な証拠となる可能性を信じて、これからも働きかけを続けていきたい。

<図7>直径1メートルの巨大十分杯



（左から、磯田長岡市長、株式会社アルモの柴木社長、中越鋳物青年研究会の宮下会長）

このように、提案事項の多くを実現することはできなかったが、いくつかの取り組みは実現ないし実現に向けて進行している。中でも、十分杯が長岡市のふるさと納税の返礼品として採択されたことは、十分杯を長岡市の代表的なもののひとつとして認識されつつあるという意味で、大いに意義のあることである。

今後は、ビジネスコンテストや今年度開催した十分杯アイデア会議などで出たアイデアを、アドバイザーなどの方とともにブラッシュアップし、より実現可能性の高い企画を提案するべく活動が続ける。

以上が、昨年度の提案事項についての総括である。

2.2 今年度の活動 -広報活動-

2.2.1 「越乃 Shu*Kura」車内でのイベントの継続

昨年度に引き続き今年度も広報活動の中心は、観光列車「越乃 Shu*Kura」(以下、シュクラ)車内でのイベントであった。昨年度の開催日程を終えた後、長岡観光コンベンション協会(以下、コンベンション協会)を通じて JR 新潟支社よりイベント継続の打診があり、今年度も乗車することとなった。今年度は、4 月から 11 月にかけて計 7 回のイベントを開催した。参加者について正確な数値は計測していないが、コンベンション協会が実施したアンケートの回収数から、7 回を通じて 300 名程度の参加があったと推測できる。これは、昨年の 11 回実施、450 名程度の参加という数値に比して、1 回当たりの参加者が増えていることを表しており、喜ばしい限りである。

さて、イベントの継続は我々にとっては嬉しい話ではあったが、列車内の限られたスペース、限られた時間の中で、いかに初年度との違いを出していくかという点には苦労した。そこで 3 つの改善策を実施した。1 つ目は、説明資料の更新である。昨年度の研究成果である「十分杯伝来時の江戸と長岡の経済状況について」を年表にまとめ、イベント時に掲示した。2 つ目は、説明以外に参加者との「対話」を重要視したことである。昨年度は、ゼミ生が十分杯について講義的に説明するスタイルが中心であった。しかし、こちらが一方的に話すだけでは一体感が生まれれないと思い、今年度は参加者の発言を積極的に受け止め、それに答えるように解説を行った。これにより、参加者にとってより興味のある部分を重点的に解説することができたと思っている。3 つ目は、「留学生による多言語での情報発信」である。本学の留学生に協力を依頼し、イベントの様子を英語、中国語、ベトナム語、モンゴル語でフェイスブックに掲載してもらった。当初は、同郷の乗客に対する母国語での対応も想定していたが、今年度の外国人乗客はツアー等での参加が多く通訳者がいる場合がほとんどであったため、そのような機会はなかった。以上の 3 点が、昨年度の経験を踏めた上での今年度の改善点であり、ある程度の効果があったとみている。その証拠として、今年度に入ってから Web 上で、シュクラでの十分杯イベントについての情報記事やブログ記事が増加傾向にあることが確認された。

また、昨年度からの活動が評価されゼミ生 1 名が、JR 東日本新潟支社より感謝状を頂いた。大変光栄に思うとともに、貴重な活動の場を提供してくださった、JR 東日本新潟支社ならびに長岡観光コンベンション協会に、この場を借りて深く御礼申し上げる。

<図 8>越乃 Shu*Kura 車内イベントの様子

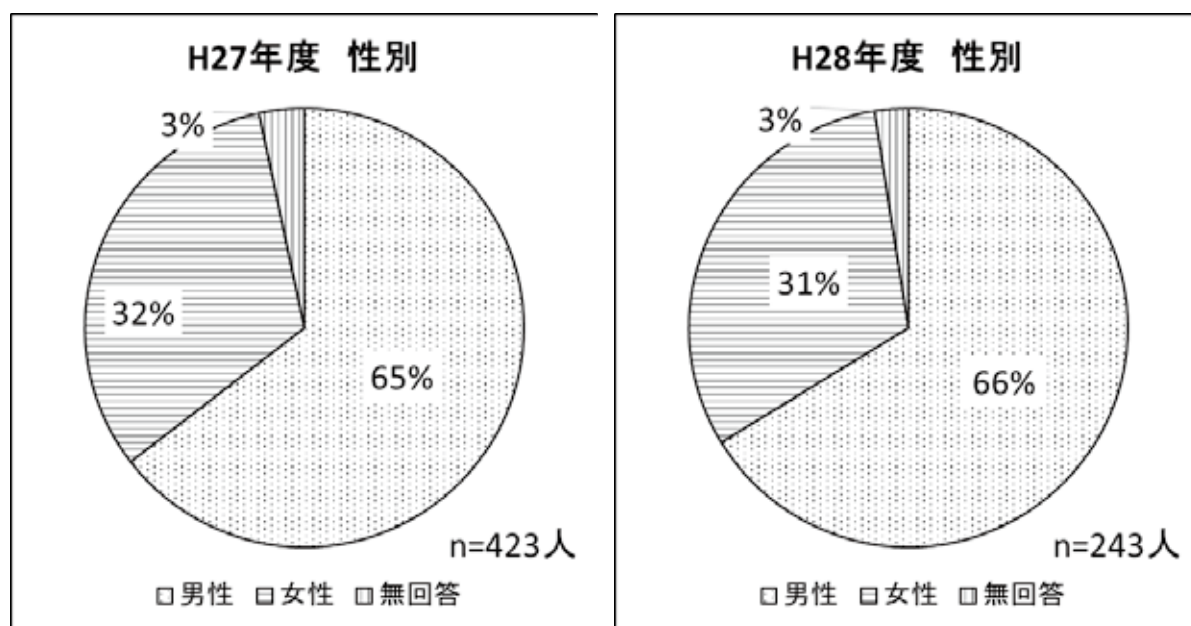


＜図 9＞ JR 新潟支社から感謝状を頂いた

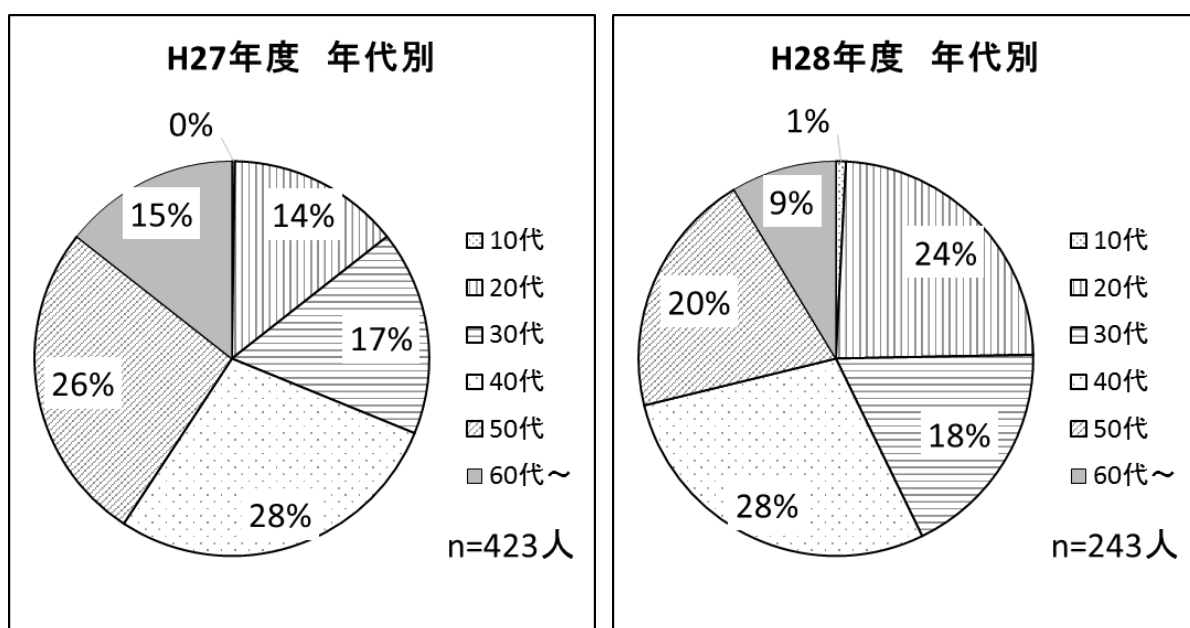


ここで、シュクラにて実施したアンケートの結果に少し触れておきたい。まずイベント参加者の性別、年齢層と県内外比についてである。昨年度と今年度で、イベント参加者の男女比（図 10）がおおよそ 2：1 であることに変化はなかった。しかし、年齢別（図 11）でみると 20 歳代の参加者が昨年度より約 10 ポイント上昇し全体の 4 分の 1 に迫っている。30 歳代でもわずかながら約 1 ポイントの上昇がみられ、今年度はより若い世代に十分杯と長岡の地酒を PR できたことが成果として指摘できる。同時に、特定の年代に偏った分布をしているわけではないため、「幅広い年代を対象とする」か、年代を絞り込むのであれば「多品種少量的」な考えに基づく PR が必要になってくることが確認された。

＜図 10＞昨年度と今年度のシュクラ車内イベント参加者の男女比

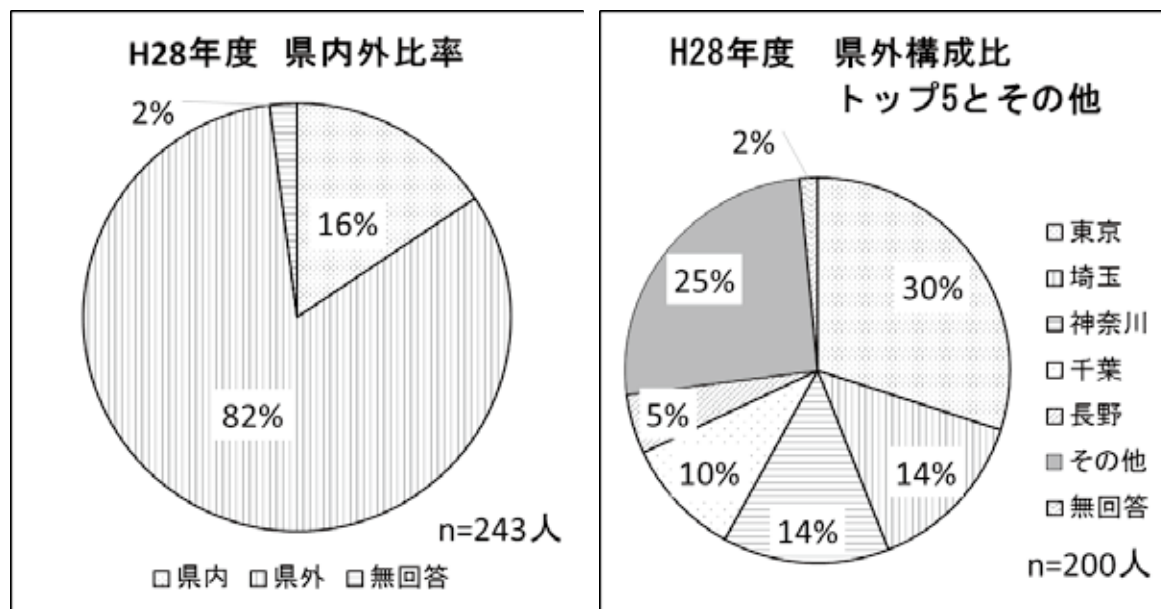


<図 11> 同、参加者の年代別割合



なお、県内外比率（図 12）には昨年度と大きな変化は見られなかった。県外の内訳についても昨年度同様に、関東地方と長野県からの参加者が 4 分の 3 を占めた。このことから、今後の広報活動を県外に展開していく場合、それらの地域での PR がシュクラの活動との相乗効果を生む可能性が示唆された。

<図 12> 今年度の参加者の県内外比率と県外構成比

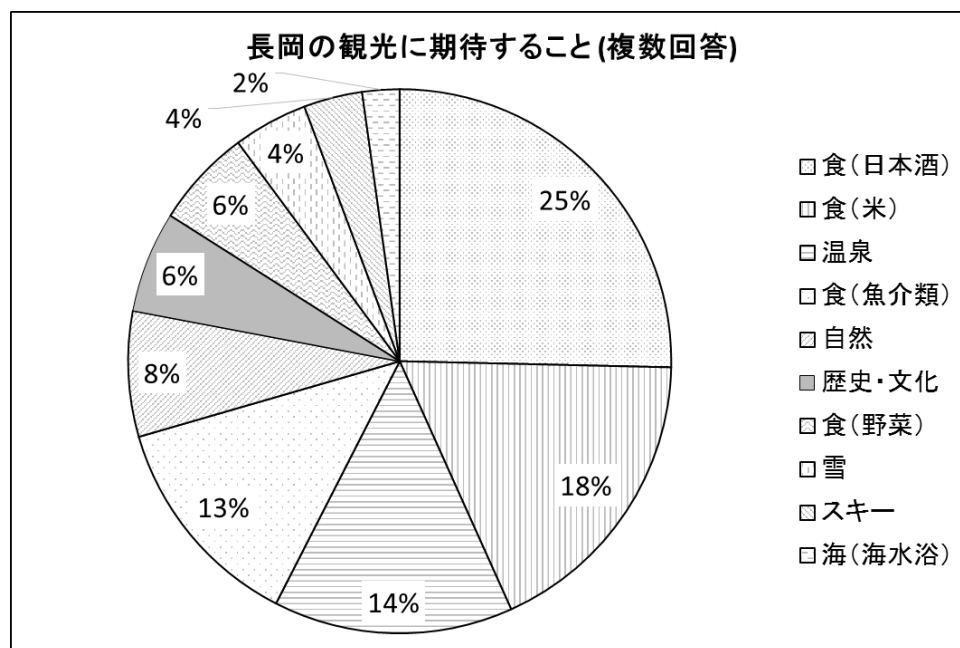


そして、「長岡を観光するとして、期待することは何か（複数回答可）」（図 13）という問いに対し、「日本酒」という答えが 4 分の 1 を占めた。これはシュクラ車内という場所柄、当然と言えるかもしれない。それを踏まえても、日本酒、米、魚介、野菜の「食」という回答が 6 割以上を占めたことは、多くの観光客が「食」への期待を胸に長岡を訪れていることを示している。もう 1 点注目したいのは「温泉」という意見が 14% を占め全体の 3 位

にランクインしたことである。長岡は温泉の豊富な地域でもあるためこれと十分杯を絡めていくのも、方向性としては面白いのではないかな。また、「歴史・文化」を期待する方は6%にとどまり、十分杯の広報においても、その歴史をいかに「手軽に」知ってもらうかが重要であることを再認識した。

このアンケート結果を参考にしつつ、来年度以降も改善を続けリピーターにも飽きられないイベントづくりに取り組んでいきたい。

<図 13> 「長岡を観光するとして、期待することは何か？（複数回答可）」



なお、本項目の作成にあたっては一般社団法人長岡観光コンベンション協会よりアンケートデータの提供をいただいている。この場を借りて深く感謝申し上げる。

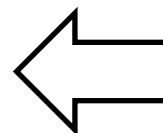
2.2.2 「長岡酒の陣」への参加

長岡市から誘われ長岡酒の陣への参加は今年度で5回目になった。例年通り十分杯専用のブースを頂き、来場者に十分杯や長岡の歴史の説明を行った。来場者にとってはお酒を楽しむ他のブースとは違い、長岡の歴史や教訓に触れることができたことが魅力的だったようで、そういったお言葉を多く頂いた。また、高見副市長（長岡市）も来場され私たちを励ましてくれた。これまでの長岡酒の陣よりも大きな賑わいを見せていたように感じる。ゼミナールのメンバーにとっての成長の場になり大変意義を感じている。説明力や会話力を高めるためには、活動初期のような学外での地道な広報活動が“修行の場”として重要であることを再認識した。一方で十分杯の紛失が相次いでおり、活動内容の見直しが急務である。

＜図 14＞今年度の長岡酒の陣の様子



＜図 15＞今年度の長岡酒の陣のチラシ



2.2.3 「長岡まちゼミ」への参加（2年目）

今年度も「長岡まちゼミ」に参加した。9月に開催された「第5回長岡まちゼミ」にて、CoCoLo 長岡内の「わがんせ」（十分杯を販売している店）と共に、十分杯で長岡の地酒を試飲するイベントを行った。2回のイベントで来場者は15名ほどであり、座談会のような和やかな雰囲気の中で、十分杯を体験しながらゼミ生が解説を加えていった。少人数のため、丁寧に説明することができた。また、私たちにとっても市民の十分杯に対する生の声をじっくりと聞くことができ、貴重な時間となった。参加者の声として最も目立ったものは、「十分杯を聞いたことはあるがよく知らない」あるいは「知ってはいるが見たことがないからよく分からない」という声であった。このような意見に応えるためには、私たちが普段展開している試飲による「体験型」のイベントは有効であると考えられるため、今後

も積極的に展開していきたい。

なお、「第 6 回長岡まちゼミ」への参加も決定しており、2 月中に開催予定である。

＜図 16＞長岡まちゼミの様子



2.2.4 「まちなかキャンパス長岡」での市民プロデュース講座の実施

今年度の新たな取り組みとして「まちなかキャンパス長岡」（以下、通称の「まちキャン」を用いる。）にて、十分杯の市民向け講座を開催した。これは、まちキャンで市民からの応募によって開催される「市民プロデュース講座」に参加申請をし、採択されたものであった。なお参加者は、満員の 30 名であった。講座の内容は以下の通りである。

＜表 3＞まちキャン十分杯講座 各回の内容

| 日時 | 内容 |
|----------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 5 月 11 日(水) 第 1 回 | 題：「長岡藩と十分杯」 長岡藩と十分杯の歴史・関わりについて知ってもらうため、講義形式で展開した。長岡藩牧野家第 17 代当主 牧野忠昌氏ならびに、長岡歯車資料館長 内山弘氏にご講演を頂いた。 |
| 5 月 18 日(水) 第 2 回 | 題：「十分杯で試飲しながら教訓と原理について考える」 初回の内容への補足として、十分杯の教訓・精神の説明と、それが長岡にどのように貢献してきたかをゼミ生が説明した。同時に、これまでの活動報告も行った。その後は、実際に長岡の地酒を味わい、透明の模型による実験も行った。 |
| 5 月 25 日(水) 第 3 回 | 題：「十分杯を広めるアイデア会議」 参加者を 2 班に分け、ゼミ生も加わって十分杯を広めるためのアイデアや、実現したら面白そうなことなどを話し合った。最後に付箋紙を使って両班の意見を共有した。 |

特に第 3 回のアイデア会議は、「十分杯会議」の新しい形として試験的に開催したものである。これまでは十分杯をよく知っている、あるいは関わりのある方々を中心に会議を開催していた。しかし、市民の方々の十分杯に対するイメージや意見を耳にする機会が少なかったという問題意識があり、その第一歩として今回のアイデア会議を行った。その中で、今後の活動の参考となる意見が多くあった。特に印象に残っているのは「サイフォンの管の内径を大きくすることで、酒が一気になくなるようにすること」と「十分杯ではなく意味の面から考えた“充分杯”という名称にすべき」という 2 点である。

また、「読み方として“じゅうぶんはい”“じゅうぶんぱい”どちらが正しいのか」という質問があったが、これは私たちにとって予想だにできなかったものであり、十分杯を知らない方と私たちとの目線の差を常に意識すべきだということを実感した。

講座を通じて、参加者の皆様からは「長岡の十分杯の歴史の深さを実感した」「長岡が他所に誇れるものだ」といった感想を頂き、十分杯の広報活動においてこういった講座形式のものを展開していくのも意義があることを実感した。

また、講座の様子は UX、NST、新潟日報、読売新聞の 4 社に取材、紹介を頂いた。

<図 17> 講座第 3 回 「アイデア会議」の様子



<図 18> 講座の様子を伝える読売新聞の記事



2.2.5 「ながおかバル街」への参加

今年度ゼミアドバイザーである、NPO 法人まちなか考房事務局長の大沼広美氏からの誘いを受け「ながおかバル街」に初参加した。なお、本学の地域活性化プログラムでは、各取り組みにつき 2 名の学外アドバイザーがいる。現在、権ゼミでは十分杯の他に酒粕の活用にも取り組んでおり、大沼氏は酒粕プロジェクトのアドバイザーである。

バル街とは地域・街の活性化と飲食店の活性化を目的として地域・街が密着して開催するバルを食べ歩き・飲み歩きするグルメイベントのことである。バルとは、英語で BAR と書いてスペイン語でバルと読む。食堂と喫茶店と居酒屋が一緒になったもので、スペイン等の南ヨーロッパでは地域のコミュニケーションの場として使用されている。

<図 19> スペインのバルの様子



このバル (BAR) と街を一体化させたものがバル街である。日本全国で開催されており、一般的に数枚のチケットを購入し、飲食店でそれとお酒やおつまみと交換しながら地域を回るというスタイルとなっている。今回私たちはバル街のイベントとして長岡の日本酒飲み比べを行った。なお、本取り組みは内田エネルギー科学振興財団の後援によって行われたことを記しておく。長岡市内の 15 の酒蔵の純米酒を道行く人に飲み比べてもらい、味覚調査を行うことで、長岡市の各酒蔵の日本酒味覚チャートを作る (補論 2 参照) という企画である。権ゼミナールでは十分杯の広報活動を通じて、様々な方から、「日本酒をみたいけど数が多くて選べない」、「自分に合う日本酒が見つからない」という言葉を耳にして来た。十分杯は酒器であり、その性質上、日本酒とは切っても切り離せないため、日本酒の活用法についても権ゼミナールは目を向けていた。今回のバル街ではこれまでにない新しい刺激を受けた。また、客足は予想を大きく上回る大盛況で、試飲用のお酒を買い足したほどであった。

＜図 20＞バル街当日の權ゼミブースの様子



2.2.6 悠久祭での活動

私たちは、10月29、30日に開催された「悠久祭（本学の学園祭）」での広報活動を行った。ここでの活動は、本学の教室を使用し、普段あまり見ることや触れることのない十分杯の展示や十分杯についての説明を行った。その際は、実際に十分杯の仕組みが分かるように私たちが作ったプラスチック製の透明な十分杯の模型に、食紅を溶かした水を用いて、十分杯の中でどのように水が動くのかを見て取れるようにした。

また、バル街と同様に日本酒の試飲を来場者にしてもらい、味や香りを皆様に判断してもらった。チャートに味や香りなどのシールを貼ってもらいチャート作りのデータ集めも行った。対象者の年齢・性別によって味覚が変わることを実感し驚いた。

悠久祭での活動では、十分杯について知っている人もいたが、やはり知らない人の方が多くいることが実感として分かった。この活動を通してもっと多くの人に十分杯の良さが伝わっていけば、もっといろいろな活動につながっていくのだろうと思った。

また、来場客も例年に比べて多かったし、利き酒でもいろいろな意見を頂き、改めて思うところもあり、とても良かったと思っている。先述のバル街では、多くの来場者からチャートづくりについて「目の付け所が良い」とのお言葉を頂いた。その反面、来場者が多すぎたため個別の会話の中から新たな気づきや意見を得ることは難しかった。今回の悠久祭では、例年より多いとはいえ手に負えないほどの来場数ではなかったため、十分杯にしてもチャートにしても、丁寧に説明することができた。それによって、新しい発見や、いろいろな意見を皆様から頂き、我々もまた、一步成長できこれからの活動でも生かしていきたい。来てくださった皆様には、本当に感謝している。

＜図 21＞悠久祭での展示の様子



2.2.7 Facebook の開始

昨年度の権ゼミナール Twitter 開設に加え、SNS の活用をさらに充実させるため、今年度から Facebook を開始した。これにより、以前よりも容易に広報ができるようになり、私たちの投稿件数も大幅に増えた。ブログ、Twitter、Facebook と様々なツールを使うことで、更に情報発信が行いやすくなった。また、写真なども同時に掲載でき、活動の記録にも役立っている。

一方で、以前作成したブログ、Twitter の更新が減っているのも事実である。今後はこの現状を踏まえて、開設するだけでなく「継続」「運用」していく方法についてゼミ内で真剣に検討していきたい。

＜図 22＞Facebook の開設



2.2.8 「高野邸」での広報活動

4 月 16 日、17 日の 2 日間、悠久町にある「高野邸」にて十分杯の広報活動を行った。これは、NPO 法人まちなか考房とのコラボレーションにより実現したものである。民家での広報活動は初めてであり、年度が始まってすぐということもあり広報活動に慣れたゼミ生が少ない中での活動でもあったため、なかなか大変であった。長岡歯車資料館の内山館長から貸して頂いた卓上噴水が、子供達から好評を頂いた。そして、高野様との会話はとても有益であった。長岡の歴史や人前での話し方の心得などを教えてもらい、とても貴重な経験となった。

<図 23> 高野邸での広報活動



2.2.9 「県立歴史博物館」での展示

12月3日から1月9日にかけて、新潟県立歴史博物館での「第13回マイ・コレクションワールド」展に出展した。同展は新潟県立歴史博物館友の会が主催し、同会員以外にも一般のコレクターが収集した多彩なコレクションを展示し、展示品だけでなくコレクターの思いやその背景をも知ることができるユニークな展示会である。

これは、本学職員に歴史・芸術関係のネットワークとつながりを持つ方がおり、その方を通じて歴史博物館側へ参加意思を伝え、このような大舞台への出展が実現できた。

この場を借りて、職員の方、ならびに県立歴史博物館の皆様にも深く御礼申し上げる。

<図 24> マイ・コレクションワールド展のポスター

新潟県立歴史博物館友の会主催展覧会

ある時は、草をかぶってカモフラージュし
またある時は、草の根をかき分けて心を鬼にして集める
こうして集めた物を、他の鬼に見つかからないよう
草をかぶせて守り続けた・・・

平成の蒐集家たちによる
マイ・コレクション・ワールド
第13回

蒐集集

※写真はイメージです
鬼の展示はありません

平成28年 平成29年
12月3日(土)～1月9日(月・祝)
※毎週月曜日、年末年始(12/28～1/3)は休館。ただし、1/9は開館。

■時間 午前9時30分～午後5時 ■入場料 無料 ※常設展示の観覧は有料です。
■会場 新潟県立歴史博物館企画展示室 ■問合せ TEL 0258-47-6135 FAX 0258-47-6136
(長岡市関原町1丁目学楼現堂2247番2) E-mail rekitomo2014@yahoo.co.jp

主催 新潟県立歴史博物館友の会 共催 新潟県立歴史博物館

第13回
マイ・コレクション・ワールド

映画チラシ
が語る上映史

ペットボトルのふた
なじもん友の会交流展示

蛇口
なじもん友の会交流展示

**日本初のFM放送局
長岡教育放送局**

小学生全集

十分杯

手ぬぐい

土器
友の会分科会 長岡土器通り同好会
会員創作活動展

方言の酒

貧乏徳利

ループ組紐
友の会分科会 糸の会
会員創作活動展

**全国の
花火大会
プログラム**

**納豆
パッケージ**

昔の絵はがき

**新潟県内にあった
水族館**

**体験コーナー
組みひもミサンガを作ろう**

古くから伝わる技法で自分だけの
組みひもミサンガを作ります。
会場：常設展示室体験コーナー
日時：12/3,4,10,11,17,18
13:30～16:00
(受付は15:30まで)

◎体験無料
ただし常設展示料が必要
(一般519円 高校生・大学生200円 中学生以下無料)

新潟県立歴史博物館
The Niigata Prefectural Museum of History

会場では3つのショーケースに、本学所蔵の十分杯の他、ゼミアドバイザーの渡辺茂様のコレクションも併せて40点ほどを展示した。会期中には1,508名の来場があり、新聞にも取り上げられるなど話題となった。

<図 25>同展を伝える記事（2016.12.4 新潟日報朝刊より）



2.2.10 メディア出演

今年度は、私たちの活動を様々なメディアにから取り上げて頂くことができた。特に UX 新潟テレビ 21 の番組では、先述のまちキャンでの市民講座を中心に、十分杯を2度に渡って取り上げてもらった。その内1回は、夕方のニュース番組内に特集コーナーを設けて頂いた。その際、本物の十分杯を使った実演の様子を放映してもらったことで、これまで以上に具体的に十分杯のことを伝えることができ、大きな意義があった。また、放送後には大きな反響があった。私たちだけでなく販売店にも十分杯についての問い合わせがあり、影響力の大きさを実感した。企画・取材を担当されたスタッフ、記者の皆様に、この場を借りて深く御礼申し上げる。

また、テレビだけでなく新聞・ラジオでも紹介されたことで、より多くの方に十分杯の魅力を発信できたと思っている。種々のメディアに出演しその影響力の大きさを実感した。このことは今後の活動に役立てていきたい。

<図 26>6月14日 UX 新潟テレビ 21 生放送番組出演時の様子



2.2.11 太刀川喜三様よりの十分杯寄贈

これまで私たちは、郷土史家の太刀川喜三氏（ゼミアドバイザー。平成 27 年度まで。）より借りている十分杯コレクションを、本学学生食堂前にて常設展示していた。今年度、太刀川氏より「十分杯広報活動の一層の充実のため」として、十分杯を正式に寄贈したいとの申し入れがあった。これを受けて 5 月 23 日、本学にて寄贈式を執り行い、本学からは感謝状を贈呈した。太刀川氏は、数十年にわたって集めてきた貴重な十分杯をすべて本学に寄贈くださったのである。そのお心に、最大限の敬意を表したい。

貴重な、また多量の十分杯を頂戴し、太刀川氏にはこの場を借りて改めて感謝申し上げる。同時に、私たちに託された「長岡の歴史」「十分杯」を多くの方に伝え広めるという使命を重く受け止め、たゆまぬ努力を続けることを誓うものである。

2.2.12 「長岡イノベーションカレンダー」制作協力

「長岡イノベーションカレンダー」とは、シンクタンク・ザ・リバーバンクが中心となって作られたカレンダーである。その内容は、長岡における先進的・独創的な取り組みをする企業・団体を紹介するもので、これまであまり知られていなかった長岡の特徴を知らしめようとするものである。

今回、同カレンダーの 2017 年版において 1 月のページに十分杯が紹介されることになり、大変光栄に思っている。私たちは紹介文の原稿を担当した。先述のような趣旨を持つカレンダーに掲載されたことは、市内における十分杯への注目度の高まりを感じさせるものであり、大いにモチベーションが高まった。

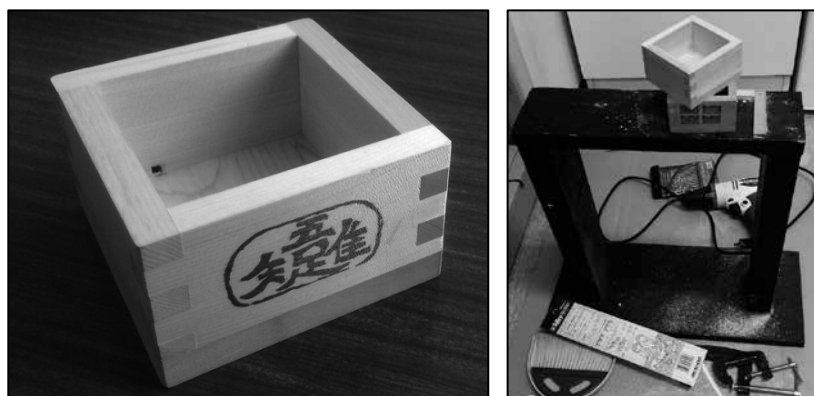
＜図 27＞長岡イノベーションカレンダー



2.2.13 十分杯の自作

今年は新たに十分杯の自作に挑戦した。本ゼミのアドバイザーである長岡歯車資料館の内山館長から、道具一式と木製の枡をお借りして取り組んでいる。外側の穴と管の部分は電動ドリルで、内側の穴は彫刻刀で加工を施し、サイフォンの仕組みを再現することに成功した。しかし、これまで十分杯の自作をしたことがなく、工具の扱いにも慣れていなかったもので初めのうちはたくさん失敗してしまい、十分杯の製作の難しさを実感した。また、「吾唯足知」「Not Too Much」のゴム印を作ったが、これも繊細で大変な作業であった。100%成功することができないのが現状である。出来上がった十分杯を内山氏に見ていただいたところ、よりうまく製作するためのアドバイスを受けることができた。今後は、自作した十分杯をイベント等で販売することも検討したい。

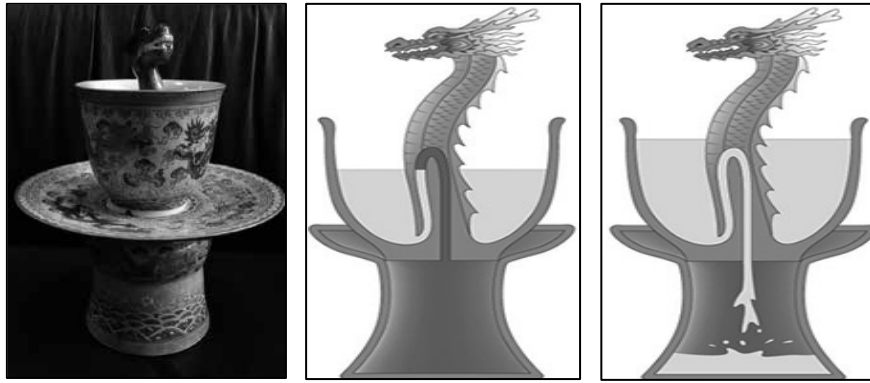
<図 28> 自作の枡十分杯と工具類



2.2.14 「公道杯」についての研究

今年度新たに調査したこととして、中国のサイフォン杯である「公道杯」の名前の由来について述べたい。中国にも十分杯と同じ仕組みの杯がある。平心杯、莫貪杯とも呼ばれているが、最も一般的な名前は公道杯である。サイフォン杯であるため、中の構造は日本の十分杯と全く同じであるが、異なるのは飾りと模様である。杯の外側とお皿に五本の爪を持っている龍が描かれている。それが八頭であり、飾りとして作られたのが一頭ある。つまり、合わせて龍が九頭となる。中国の易经によれば、九は陽を表し、陽の象徴が龍である。また、五は君主を表す。

<図 29> 九龍公道杯（左）とその構造（中・右）



（出所）左 「乾隆年の龍和九龍公道杯－新浪博客」

http://blog.sina.cn/dpool/blog/s/blog_5f9189050102wpk9.html?vt=4（2017.1.23 時点）

中・右 「中國的科學智慧－九龍公道杯(青釉瓷)－賽先生科學工廠」

<http://www.mr-sai.com/web/product.php?id=CN110218>（2017.1.23 時点）

現在、中国のサイフォン杯の飾りを見ると、デザインは主に龍である。ところが、老人もあるようである。本学所蔵の深川製磁（宮内庁御用達）の公道杯はまさに飾りが老人となっているのである。その意味からすると、本学所蔵の公道杯はとても珍しく、しかも完成度が高いものと言えよう。ところで、なぜ、老人が飾りにになっているのだろうか。老人はただの老人ではなく、寿老人で酒を好み長寿の神とされている。寿老人は不死の靈薬を含んでいる瓢箪を運び、長寿と自然との調和のシンボルである牡鹿を従えている。手には、これも長寿のシンボルである不老長寿の桃を持っている。これまで飾りの老人は誰だろうと疑問に思っていたが、謎が解けた。また、左手に持っている丸い物が桃だということも分かったので、今後の広報活動の際に有効に活用していきたい。

続いて、なぜ公道杯と命名されたかについて述べたい。まず、今回も公道杯がいつごろから作られたかについて知ることはできなかった。ただし、公道杯という名前の由来については説明することができた。

明朝を開いた朱元璋が江西省景德鎮に皇室御用達の窯を開設して、腕利きの陶工たちが苦勞に苦勞を重ね公道杯を完成させたと中国のウェブサイトで紹介されているが、誰が考案したかについては記述されていない。また、この段階での名前は「九龍杯」である。もし、明代初期に公道杯が初めて作られたとすれば、世界で最初に作られたサイフォン杯は間違いなくギリシャのピタゴラス杯となる。

さて、景德鎮で作られた九龍杯を朱元璋(洪武帝)に献上したところ、開国功臣を集めて宴会を開いた。その際、洪武帝は景德鎮の九龍杯に自ら酒を注ぐから、功臣たちは皇帝の前で自分の功績が杯のどれほどに当たるかを指せと命じた。すると、酒好きで自身の功績が最も大きいと考えていた徐達は杯の高いところまで指を指した。洪武帝が溢れるほどいっぱい注いだところ酒は一滴も残らず無くなってしまった。皆が騒めいているとき、洪武帝が「足るを知る者には酒が残り、戒めを知らない者には酒は一滴も残らない」と言い、この宴席でこの杯の名前を「公道杯」と名付けたのである。公道とは、「世の中の道理」「当たり前」を指すのである。つまり、「欲張る者には何も残らず、戒めるものには残るとというのが世の中の道理で、当然のことだ」ということである。

2.2.15 ホテルメッツ長岡の「十分杯宿泊プラン」

今年度、市内のホテルメッツ長岡では、十分杯と地酒をセットにした宿泊プランを販売していた。これは十分杯と柿の種、市内酒蔵の純米酒がセットになったものであった。私たちが直接何かを提案したわけではなかったが、むしろ私たちと関わりのなかったところでも十分杯の活用が始まりつつあることを実感し、嬉しく思っている。

2.3 今年度の活動 -企画・提案活動-

2.3.1 「たいこうビジネスプランコンテスト」および

「NAZE ドリームプロジェクト」への応募

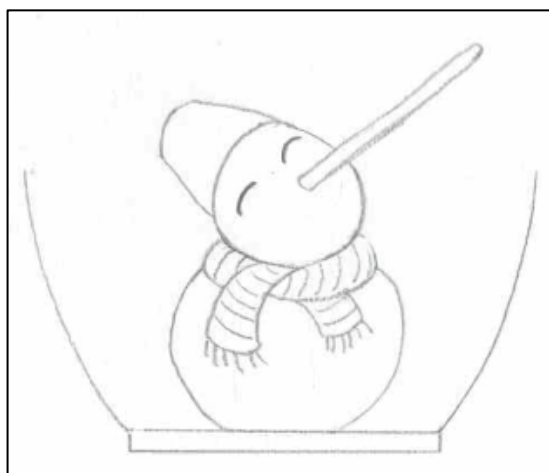
新たな活動の一つにビジネスコンテストへの応募がある。今年度は主に大光銀行主催のたいこうビジネスプランコンテストと NAZE 主催のモノづくり PR 事業に応募した。たいこうビジネスプランコンテストは成長分野等における革新的・創造的なビジネスプランの実現・成長に向け、同行がその実現をサポートすることで、新産業・新市場の創出を促進し、地域の雇用創出など地域活性化に貢献することを目的としたコンテストである。残念ながらこちらのコンテストには落選してしまったが、来年度以降、再挑戦したい。

NAZE ドリームプロジェクトは、世界へ「長岡モノづくり技術」を広く PR するため、学生からアイデアを募りそれを形にしていこうという企画である。今回私たちは、既存商品であるアルミ製十分杯の新デザイン開発を提案したところ、採用された。現在、長岡大学内のデザインサークルと連携し活動をしている。

そして、デザイン案として「①ピノキオを模した雪だるま（図 30）」「②飾りに縁起の良い文字を入れる（図 31）」の 2 点を提案し、②が採用となった。その理由として、「①案に比べて造形がシンプルで、コスト低下を図れること」と「メーカー側がかつて持っていたアイデアと似ていて、イメージしやすかったこと」の 2 点があった。

今後の進展は未定の部分が多いが、2 月中に完成できれば「ニイガタ IDS デザインコンペティション 2017」に出展することになっている。

＜図 30＞ピノキオ雪だるま



＜図 31＞文字入りの飾りのイメージ



2.3.2 「NIIGATA ビジネスアイデアコンテスト」への応募 (および、その前段としてのセミナー参加)

今年度の企画・提案活動のうち最も大きな進展があったのは「NIIGATA ビジネスアイデアコンテスト」への応募であった。

まずは、同コンテストへの応募のきっかけとなった「The 6th U.S. Embassy-Keio SFC-TOMODACHI Entrepreneurship Seminar」(以下、TOMODACHI セミナー)への参加について紹介したい。同セミナーは9月6日から9日までの4日間、神奈川県横浜市の慶応義塾大学日吉キャンパスにて開催された。セミナー名に冠された「TOMODACHI」とは、在日米国大使館と米日カウンシルによって、東日本大震災の復興支援から生まれた枠組みである。具体的には、教育や文化交流といったプログラムを通じて日米の次世代のリーダーの育成を目指すものであり、同セミナーはこの趣旨に基づき、日米の若者の企業家精神(Entrepreneurship)を養うことを目的としていた。そして、あらかじめ考えてきたビジネスアイデアを4日間でブラッシュアップし、最終日のプレゼンテーション審査にて、上位のチームは最終選考、その先のアメリカ研修と進んでいくというものであった。

<図 32> セミナー開会式の記念撮影 全国 14 チームと学生スタッフが集合



セミナーには、全国各地から書類審査を通過した 14 の団体が参加した。各チームに担当の学生スタッフが 1 人配属された。また、実社会で活躍する社会人メンターからメンタリングを受けることができた。これにより、アイデアや気づきなどのフィードバックを得て、チームのビジネスアイデアの完成度を高められたと考えている。中には宿泊施設にまで来て、深夜まで相談に乗ってくれたメンターもあり、私たちもそれに応えられるよう寝る間も惜しんで取り組んだ。そして、これまでにない知的刺激を受け、チームの中にはセミナー中の 4 日間で睡眠時間が 4 時間しかない者もあり、一晩の議論で A1 サイズのメモ紙 15 枚を使い切るなど、これまでの日常とはかけはなれた時間を、とても楽しく、有意義に過ごすことができた。

ここで得たものは多くあるが、そのうち特に 2 つを紹介したい。1 つは「全国の大学生に会うことができた」点である。他チームのアイデアやこれまでの取り組みを知り、彼ら・

<図 35>NIIGATA ビジネスアイデアコンテスト表彰式での記念撮影



なお、その後の動きとして第四銀行のコンサルティング担当部署より、私たちの提案事項の実現に向けて、ブラッシュアップやマッチングなどの支援が始まっている。実際に 12 月 20 日に 1 回目の会合を開いており、今後の方向性や定期的に会合を続けることを確認した。そして、「新潟淡麗 にいがた酒の陣」と関わりの深い、新潟県酒造組合と連絡を取ってもらい、1 月 13 日にゼミ生と共に同組合を訪ねた。目的はにいがた酒の陣で十分杯を広報することについて可能性を探り、可能なら出展したい旨を伝えることであった。結果的には、今年度の申込期限が過ぎていたこともあり、望む結果とはならなかった。しかし、同組合の専務理事自らが十分杯に強い興味を示してくださったことは、私たちにとって大いに心強かったし、次年度以降に向けて大きな意味があったと考えている。

また、その他にも今後に向けていくつかの動きが調整中であり、詳細はその都度ブログ・フェイスブック等で発信していきたい。

以上のように、これまでの長岡でのつながりを活かした 2 つのビジネスコンテストへの応募が新たな取り組みへの出発点になった。また、地域外での活動から、長岡以外にも新たなつながりができ、今後の可能性を広げることができたように思う。これらの点から、今年度の「企画・提案活動」は、これまでの「アイデア提供」だけでなく、「より具体的な提案」という新たな局面へと舵を切りその一步を踏み出したと言えよう。しかし、この流れが今年度限りで終わってしまえば意味がないし、なにより、私たちにご協力くださった多くの皆様をがっかりさせてしまうことになる。

私たちは、私たちと関わりを持ってくくださる皆様への強い感謝を決して忘れず、次年度以降へ向けて、これからも真剣に取り組む続けていくことをここに誓うものである。

3. 提案事項

本項では、毎年度恒例の「十分杯に関する私たちからの提案事項」を紹介していく。

3.1 「NIIGATA ビジネスアイデアコンテスト」での提案事項

まずは、先述した「NIIGATA ビジネスアイデアコンテスト」での 3 つの提案事項について紹介したい。それらのアイデア考案に至った背景・動機として、第 1 章で述べたような活動に取り組む中で課題が生じていたことが挙げられる。具体的には、これまでのように「十分杯」だけを PR するのではなく、その「教訓・歴史」や、それらがある「長岡」そのものを広く知ってもらう方策を考えたいと思ったのである。また、今までの私たちの活動は大学の予算に頼りきりであったことから、今後は大学に頼りすぎず、なおかつ活動をうまく継続できるような仕組みを整える必要性を感じていた。以上の 2 点を踏まえて、以下に示すアイデアを考案した。

3.1.1 「メッセージ入り十分杯の製作」

これは、自作した木製の十分杯にオリジナルのメッセージを入れる加工を施し、販売するというものである。現在、木の枡の十分杯の試作を重ねており、ゴム製のはんこなどを使用し、メッセージや絵柄を入れることにも成功している（図 36 参照）。販売に関しては、これまでの活動の中でつながりを持っており、十分杯の販売にも協力してくださっている、長岡市内の店舗に委託したいと考えている。また、空港での販売も行いたいと考える。

＜図 36＞ゼミ生が試作した十分杯

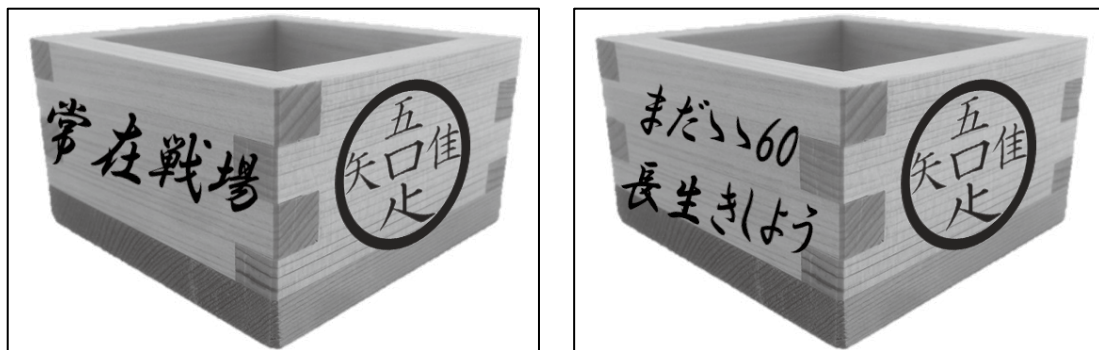


このアイデアの特徴として、私たち自身が製作することで販売価格の低下を図る。現在、市販の枡の十分杯は 1 個 2,500 円で販売されており、広報活動をしていると「少し高い」という声が目立つ。価格を下げることでより購入しやすくし、市内外への一層の普及の足掛かりにしたい。

また、空港での販売というのは、私たちの目標である「世界に十分杯の教えを発信する」ために、ふさわしい場所を考えた結果である。「長岡・日本ならではのお土産品」として、インバウンド向けに PR していきたい。

そして、このアイデアの最大の特徴は、メッセージ入りのオリジナル十分杯を製作することが、「長岡の文化の維持・継承」につながるということである。長岡には節目や祝い事の際に十分杯を贈る・配るという文化（補論 1 参照）がある。この文化を目に見える形でしっかりと残していけるのが、「メッセージ入り十分杯」である。活用例として成人祝い、還暦記念などを想定している（図 37 参照）。

＜図 37＞オリジナルメッセージの例



3.1.2 「イベントの企画・提案」

これは、十分杯に関するイベントを私たちが企画・提案し、その対価を受け取るというものである。提案先としては、観光団体や旅行会社を想定している。イベントなどに十分杯を取り入れることで、長岡らしさや独自性を強める効果が期待できる。

企画例として「十分杯で酒蔵見学」を提案する。これは、酒蔵見学において、試飲の際に十分杯を使用し、地酒を試飲・購入しながら酒蔵を巡るものである。終了後、十分杯はお土産として持ち帰ってもらう。これまでの活動の中で、シュクラ車内での十分杯で長岡の地酒を楽しむイベントが各回とも大好評であった。日本酒ファンの中には、長岡の地酒や変わった杯に興味を持つ方も多いことを実感した。そこで、実際の酒蔵でも同じようなことをやってみる価値はあると考え、この企画を考案した。私たちは、十分杯の説明や、試飲に使用する銘柄・蔵名入り十分杯の提供などによって対価を得たいと考える。

このアイデアの特徴として、参加者に長岡を深く知ってもらうことができる。なぜなら、地酒は長岡の特産品であり、十分杯は長岡の精神を表している。この 2 つを同時に体感することは、まさに「長岡を体感できる」と言えよう。また、十分杯での試飲は長岡でしかできないことであり、他地域の酒蔵見学とは一味違ったものになる。これらによって、長岡をより強くアピールできると考察する。各関係者のメリットを考えてみると、共通のものは、繰り返しになるが「他地域との差別化」である。ツアー主催者にとっては「マンネリの防止」につながるという利点がある。そのために、毎回違ったデザインの試飲用十分杯を用意するのも良いかもしれない。次に、酒蔵にとっては「見学時の販売機会の獲得」と「話題性」である。日本酒愛好家たちのコミュニティなどで「変わった体験のできる酒蔵がある」と話題になれば、宣伝効果は大きいと考えられる。最後に、私たちにとっての

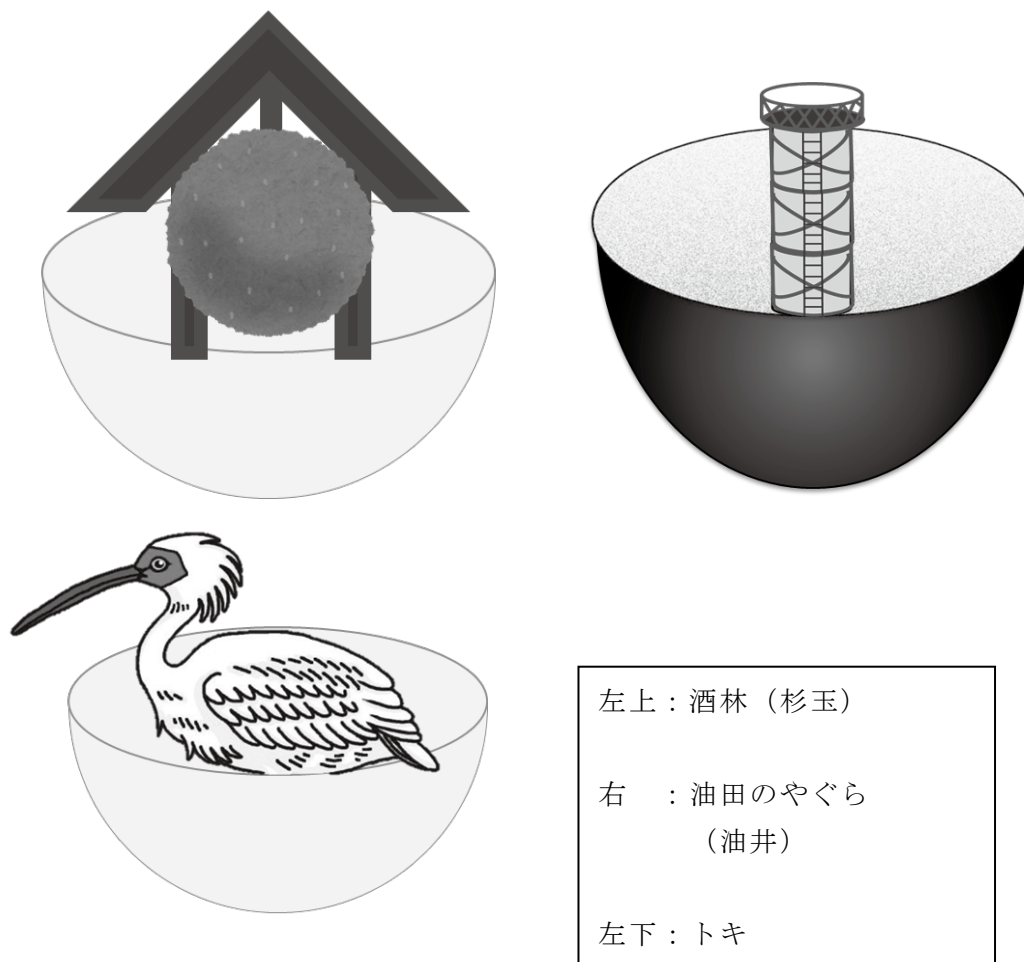
メリットは「十分杯を知ってもらえる機会が増えること」と、「活動資金の獲得」である。

3.1.3 「十分杯の製作を企画・提案する」

これは①のように自分たちで作るのではなく、「飾りやデザインの提案」「歴史背景などの情報提供」を行い、それに対して売り上げの一部を受け取るというものを想定している。

具体例として考えているのが、「長岡・新潟らしい十分杯の製作」である。現在販売されている十分杯には、長岡・新潟を想起させるデザインのものがほとんどない。そこで、長岡・新潟ならではのデザインの十分杯を作ること、「長岡・新潟を実感できる・体現する」ものへと育てていきたいと考えている。以下に、長岡・新潟らしい飾りのデザインの例を示す（図 38 参照）。「酒林」は、特産である日本酒、酒造業のシンボルであり、「油田のやぐら」は、かつて長岡に油田があり、そこから長岡が栄えていったことにちなんでいる。「トキ」は、新潟を代表する鳥として採り上げた。

<図 38>長岡・新潟らしい飾りのデザインの例



長岡・新潟らしい十分杯の製作に関して、需要は確実にあると実感している。これまで、広報活動、各種イベントを通じて少なくとも 2,000 人程度の方々と接し、実感としてそのうち約 7 割の方から「十分杯がほしい」との言葉を頂いている。一方で現状として、「十分杯が欲しい」という声を聞いても販売できる在庫がなく、販売機会のロスが生じていた。十分杯の製作提案を通じて供給を増やし、販売機会ロスの軽減につなげたいと考えている。

以上の3つがNIIGATAビジネスアイデアコンテストにて私たちが提案した事項である。

3.2 その他のアイデア

以下には、普段の活動の中で考案したアイデアについて列記していく。なお、雑考も含むため具体性は低い点に留意されたい。

3.2.1 十分杯クリアファイル・十分杯エコバッグなどの関連商品

これまで、十分杯をデザインしたグッズの製作・販売は行われてこなかった。加えて、十分杯そのものは高価であるという問題点も存在する。そこで、十分杯や「満つれば欠く」などの格言をデザインしたクリアファイルやエコバッグを販売し、十分杯や長岡の精神について知ってもらうとともに、手軽な十分杯に関するお土産品としての需要の開拓につなげられるのではないかと考える。

3.2.2 3Dプリンターによる十分杯作成

3Dプリンターを利用することで、複雑なしくみをもつ十分杯を簡単に大量生産できるとともに、これまでにない色やデザイン、質感をもつ新たな十分杯を製作することができると。これについては、3Dプリンターを保有している長岡工業高等専門学校の教員や有識者との話し合いで、問題点や解決案が検討されている。

3.2.3 十分杯にちなんだ銘柄を作る

十分杯とコラボレーションした日本酒を制作することでまたさらに十分杯の認知度向上につながると考えている。これについては酒蔵に打診したこともあったが、十分杯自体の認知度がさほど高くないため、現状では踏み込みにくいとのことであった。

4. 次年度以降への課題

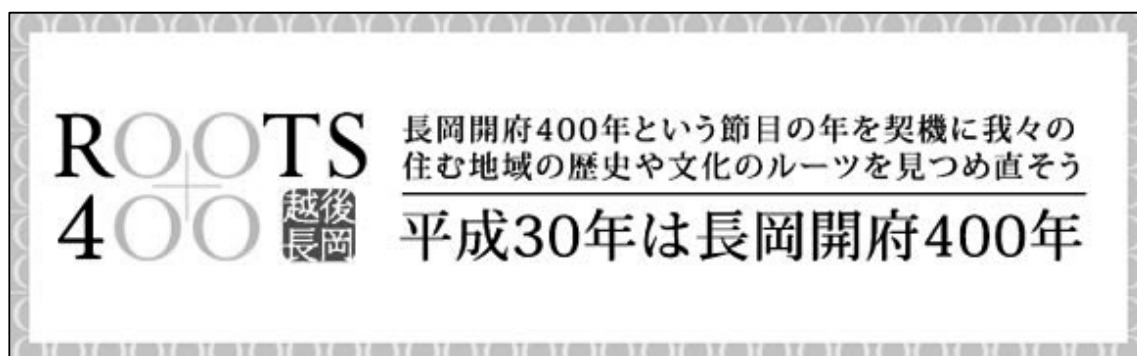
私たち権ゼミナールの十分杯を使った地域活性化への取り組みは今年で5年目になった。活動も徐々に軌道に乗り始め、活動三昧の毎日である。そんな中、私たちにとって今年度はチャレンジの年であったと感じている。私たちはこれまでの地域活性化プログラムを通じて、十分杯をPRしていく際、長岡の中だけで活動をしていくことに限界を感じていた。そこで、日本の最先端の知識を取り入れるためにこれまで取り組んだこともないビジネスコンテストへ応募した。また、今回はテーマを増やし、「酒粕」の活用についても研究を始めた（「酒粕」については別途で記述する。）。このような新たな活動に取り組むことで、権ゼミナールの結束力が強まり、学生それぞれの視野が広がったように感じる。それに伴い、これからの活動における新たな課題も見えてきた。第一に、十分杯を長岡の中だけに完結させていること。第二に、これからの活動をどのように継続させていくのかということである。まずはこの2点を来年度の最重要課題としたい。また、次のような課題も残っている。

私たち権ゼミナールでは、長岡市郷土資料館所蔵の十分杯の文化財登録も考え活動してきた。しかし長岡市立科学博物館の文化財担当の方へインタビューを行いに出向いた際、現状では難しいとのお言葉を頂いた。文化財に登録するには、文化財としての基準を満たしており、更に、対象の物がしっかりとした歴史的価値のあるものだと証明できる資料がなければならない。現在長岡市郷土資料館にある十分杯には、はっきりとした年代が分かる資料が現存しておらず、今後の研究が重要である。

来年2018年には、長岡藩開府400周年を控えている。長岡市ではこの年に向けての気運が高まっており私たちとしても大々的に十分杯をPRしていく準備を進めている。

数多くの偉人を輩出してきた長岡の精神を物語る物として「十分杯」ほどストーリー性に優れた郷土品は類を見ない。現代に通じる「足るを知る」、「満つれば欠く」といった教訓・精神を伝え広めていくためにも自分たちだけで終始せず、積極的に前に出ていき周囲を巻き込んでいく力が必要である。

<図 39>長岡開府400年に向けた「ROOTS400」プロジェクト



5. 結びにかえて

まず、本書の題名にあるように、十分杯は「問題児」である。そして、私たちは「長岡に問題児を増やしていきたい」のである。この言葉の真意を、ここまでの文中で読者の皆様にはご理解いただけたはずである。

今年度の活動は、従来に比べて「調査・研究」の部分は少なかった。その分、今までに得た知識を使って「いかに十分杯を広報するか」と、十分杯の新たな活用法を目指して「企画・提案する」活動に重きを置いてきた。そんな1年を経て、これまでの活動全てを振り返った我々がたどり着いた認識こそ「十分杯は問題児だ」という点である。第1章にて詳述したが、「地下資源」は「問題児」に化ける前の姿だと私たちは考えている。同時に、私たちの力だけでは何をも成しえないのだから、その「火付け役」になろうではないかというのが基本方針である。

長岡は地下資源が豊富である。これについては、「石油がとれた町だから」という現実的な話もできる。しかし、私たちが言いたいのはそのことではない。今一度、足元を見直そうではないか。私たちが立っている長岡の地を見つめなおそうではないか。かつて石油は「越の宝 燃ゆる水」と呼ばれたことがあった。私たちはまさに、宝の山の上で暮らしているではないか。「石油」、「稲わら」、「信濃川」と郷土の先人たちは、その時代ごとに足元の「宝」を巧みに活用し、長岡の発展を導いてきた。今度は私たちの番である。今の長岡を盛り上げるために私たちは地域を掘り起こし、新たな「資源」を見つけていかなければならない。さらには、私たち以後の世代の為にも「問題児」をたくさん残していかなければならない。今年度の活動を通じてこの点に気づいたことは、今後に向けての大きな収穫であったと確信している。

この報告書を書いているのは、2017年の1月である。十分杯の活動に取り組んできて、この時期になると毎年思うことがある。それは、「今年もあつという間だったな」ということである。今年度は、第2章で述べてきたように毎月のシュクラを中心に、高野邸、まちキャン、TOMODACHI セミナー、ビジネスコンテスト、酒の陣、バル街と大きな出来事が目白押しのせわしない一年であった。また、今年度は權ゼミにとっては3年ぶりとなる4年生が在籍していた。これはすなわち、就職活動によって半年程度はゼミ活動が制限されることを意味しており、人手不足が常態化した。正直に言う「忙しいなあ」ということは多々あった。

しかし、それは今にして思えば大いに「喜ぶべきこと」「感謝すべきこと」である。なぜなら、私たちに「声をかけてくれる人」「関わろうとしてくれる人」「頼りにしてくれる人」がいるからこそ忙しくなるわけで、裏を返せば、私たちを「信用してくれる人」が増えていることを意味するからである。

先にも述べたが、私たち自身の力だけでは何もかも実現できないことを、私たちは自覚している。十分杯会議を経ず、JR 新潟支社に直接売り込みをして、シュクラとのコラボレーションが実現し得たか。TOMODACHI セミナーを経ず、自分たちの目線だけで磨きをかけてつもりになったビジネスアイデアで、第四銀行特別賞を受賞できたのだろうか。答えは否であろう。前者が実現したのは、観光コンベンション協会の皆様の協力があった

からであり、後者を達成できたのはセミナー中お世話になった多数の社会人メンター、学生スタッフ、他大学の学生そして、参加のきっかけを与えてくださった本学職員の方の協力があつたからこそである。

もちろんここに紹介したのはごく一部に過ぎず、さらに多くの方々のお力の上に私たちの今日が成り立っている。私たちは、この信頼関係を無下にするようなことを決してするわけにはいかない。「人手不足」は問題だが、それを逃げ道にするつもりはない。力が足りなければ、もっと「知恵」を絞るだけのことである。

また、私たちはこういった素晴らしい方々との出会いが、自身にとって大きな財産になることをすでに知っている。これはゼミ活動を通じて、「アイデア考案→提案・相談→ブラッシュアップ→実現」といった流れを多少なりとも経験してきたからこそ分かるのである。今年度のゼミ生の中に、長岡市民は1人もいない。しかし、地元ではないからこそ、この長岡の地で得た「つながり」を大事にしていきたいと思っている。それが、卒業後に社会で幅広く活躍することにつながればよいと思っているし、むしろ、そうなるように挑戦を続けていくのが私たちの「責任」だと自覚している。

私たちは、十分杯の活動を通じてその教訓を深く学んできた。その真髄は「過ぎたる欲」を戒めることにあった。たしかに健康のためには、「腹八分」の食生活は良いと言えるし、常に自分の望みを100%叶えようとすれば、周囲と軋轢を生むことは必至である。これらの点では、「知足」の精神にも賛同する。しかし、ゼミ活動をしていく上では、そういうわけにはいかない。私たちの考え得る、最良の手段を常に追い求めていかなければならない。十分杯の教えには反するが、ゼミ活動に関しては今後とも「食欲」に、さらなる高みを目指して挑戦を続けていくことをここに宣言する。

最後になるが、ゼミアドバイザーの内山弘様、渡辺茂様のご両名には1年を通じて大変お世話になった。今一度、この場を借りて深く御礼申し上げる。

<図 40>ゼミメンバー集合写真 「来年度も全力で参ります！」



補論.1 十分杯入門

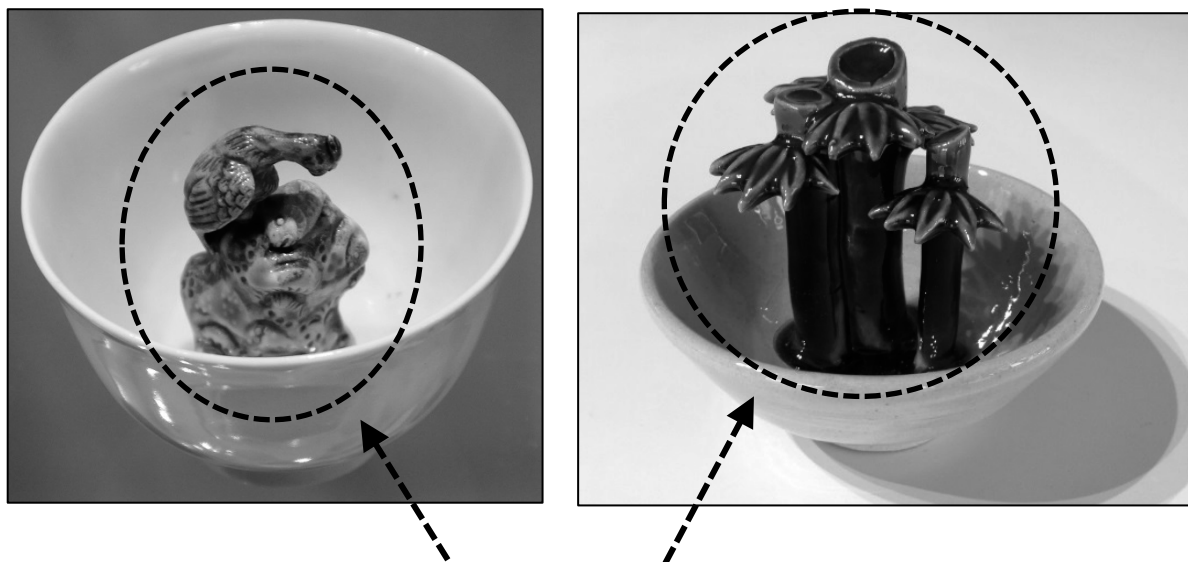
本項では、「十分杯」そのものを「特徴」「仕組み」「歴史」などに着目しながら紹介していく。本書を手にとって、初めて十分杯のことを知るという読者の方もおられよう。そのような方は、まず本項を一読されることで、十分杯のことを大まかに知った上で、第1～5章の本論をお読みいただければ幸いである。

補.1.1 4つの特徴

十分杯は陶器やガラスや木のマスなど様々な形のものが存在している。そして、多くの十分杯に共通していることは、①<補・図1>の写真のように真ん中に柱（“飾り”と呼ばれる）が立っている、②その飾りの中を管が通っている、③<補・図2>のように底に穴があいている、④一定の量（8分目程度）を超えて注ぐと、中に入っていたすべてのお酒が底の穴から漏れてしまうため杯の中は空になる、の4点が挙げられる。

十分杯はお酒を飲む際は中央にある飾りが鼻についてしまい、非常に飲みにくいいため実用性はあまりない。しかし、十分杯という杯は目でも十分に楽しむことができる杯である。十分杯の飾りは数多くの種類があるため、季節や行事によって飾るものを変えることでインテリアとしての役割も果たすことができる。人によっては、お正月に飾る家庭もあるようである。

<補・図1> 江戸時代中期の平戸焼の十分杯（左）と北越銀行の竹十分杯（右）



この造形物が「^{かざ}飾り」

この十分杯の仕組みにはサイフォンの原理というものが使われている。サイフォンの原理とは、サイフォン（ギリシャ語で、チューブ・管という意味）を使って、高いところの水を低いところへ移すしくみのことである。液体の量が少ないのであればこの原理を活用する出番は少ないが、量が多くなれば、管一本で解決できる非常に便利なものである。この原理はトイレの水道管、消火器、灯油ポンプなど私たちの身近にも使われている物がある。

<補・図 2> 十分杯の底の穴



（注）この穴と<図 1>の飾りに隠れている管がつながっている。

補. 1. 2 教訓

補. 1. 2. 1 『十分盃銘』の中の「天道虧盈^{てんどうきえい}」

十分杯には「足るを知る」という教訓がある。現状を満ち足りたものと理解し、不満を持たない、程々で満足するという意味である。しかし、十分杯の教訓として一般的に知られている「足るを知る」という言葉は、十分杯を長岡に広めたといわれる長岡藩 3 代藩主の牧野忠辰が詠んだ『十分盃銘（補・図 3）』という詩の中には出てこない。

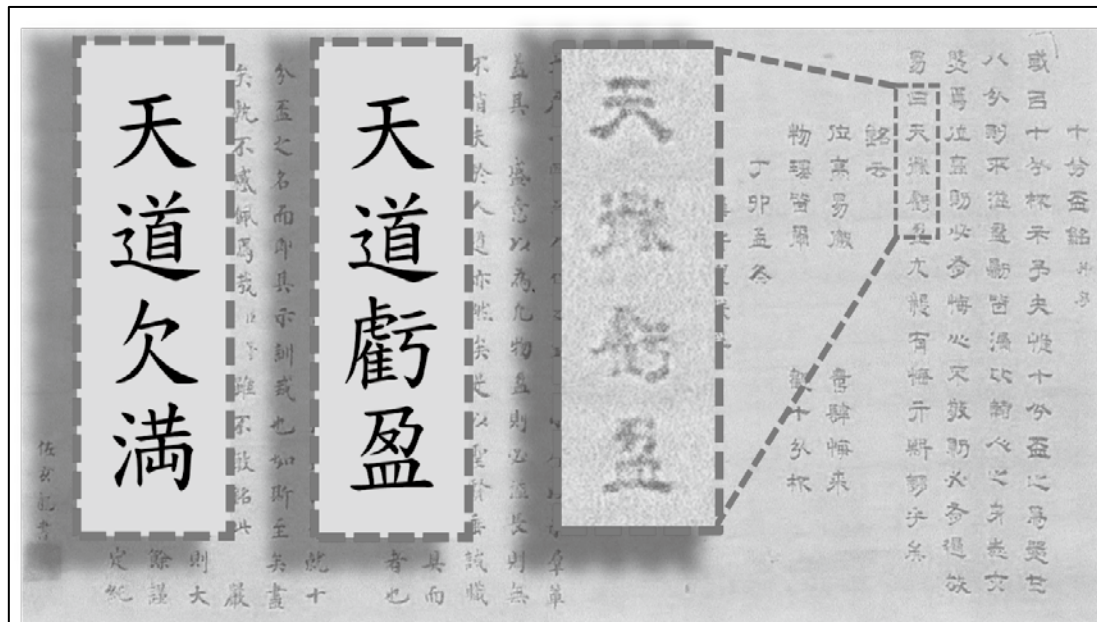
牧野忠辰は、十分杯に感銘を受けて『十分盃銘』という詩を詠んだ。その詩の中には「足るを知る」という言葉ではなく「満つれば欠く」という言葉が出てくる。「満つれば欠く」とは、あまり欲張りすぎるとかえって失ってしまうので欲張るなという意味である。

江戸時代において、長岡藩はもともと、豊かな藩であり財政的にも余裕があったが、高田城の請収、幕府の委託事務、度重なる水害などが財政を圧迫し、財政的に厳しい状況になってしまった。その頃、長岡藩には十分杯が伝わったとされる。十分杯は領民が持参したとされ、その十分杯に感銘を受けた牧野忠辰は、『十分盃銘』を詠んだという。さらに牧野忠辰は、十分杯を藩士たちの生活を戒め、節約をさせるための手段として活用した。

では、具体的にどのような表現になっているのか確認してみよう。牧野忠辰の『十分盃銘』に出てくる「満つれば欠く」は正しくは「天道虧盈」の 4 文字である。この 4 文字は、もともとは易経に出てくる言葉である。易経には「天道は盈（みつる）を虧（か）きて謙

に益し」と出てくる。「天は満ちたもの（＝盈）を欠けさせ、欠けたもの（＝謙）を満ちるようにする」という意味である。このように、牧野忠辰は十分杯を見て、大きな感銘を受けたため詩を詠んだわけであるが、大きな感銘とはずばり、‘天道虧盈’だと解釈することができる。

<補・図 3> 『十分盃銘』の中の「天道虧盈」



前述したように、飾りの中には管が通っており、約8割以上の液体を注ぐと、サイフォンの原理により底の穴から液体がこぼれてしまう。この約8割以上の液体を注ぐとこぼれてしまう様子から、‘欲張りすぎるとこぼれてしまう’というという意味で、「足るを知る」という教訓がつけられた。初めは、この足るを知るについて調べていたが、2014年10月の悠久祭で行った「第1回十分杯会議」の際に、権ゼミナールアドバイザーの長岡歯車資料館長の内山弘氏から、十分杯の教訓は「足るを知る」だが、長岡に十分杯を広めた長岡藩3代藩主牧野忠辰の『十分盃銘』には「足るを知る」は出てこず、「満つれば欠く」という言葉が出てくるというご指摘をいただいたため、「満つれば欠く」についても調べることにした。

補.1.2.2 様々な「足るを知る」と「満つれば欠く」と歴史

十分杯の広報活動を行うにあたり、十分杯の教訓についてより充実した説明をするために、‘足るを知る’と‘満つれば欠く’について調べてみると、様々なところに出てくることがわかった。

‘足るを知る’という言葉が最も古く記述されたのは、おそらく中国の『老子』で、作者の老子が生まれたのは紀元前6世紀頃だと思われる。そして、その後、紀元前5世紀になってから、インドで仏教が成立した。日本の‘足るを知る’は徳川光圀が寄進したとき

れる「知足の躑躅」が龍安寺にあり、日本には知足院という寺があることから、おそらく仏教から来ていると思われる。

日本では、江戸時代に徳川光圀が龍安寺に「知足の躑躅」を寄進したとされ、さらに‘満つれば欠く’と似たような意味を持つ「九分は足らず、十分はこぼれると知るべし」という言葉を残した。おそらく、徳川光圀も十分杯、あるいはそれと似たようなものを知っていたに違いないだろう。ただ、現代と違うのは、‘八分’ではなく‘九分’を使うということである。江戸時代前期には‘八分’ではなく、‘九分’という言葉が一般的だったのかもしれない。とにかく、長岡つまりは牧野忠辰に十分杯が伝わったのも江戸時代で、そこから長岡の儉約の精神が始まったことが文献上確認できた。

また、森鷗外は、大正5年に『高瀬舟』を書き、知足と安楽死をテーマとしている。

以下では、上述したものを、より詳細に紹介することにしたい。

① 老子

一般的に知られている「足るを知る」は『老子』の第33章である。辞書にも出てくるのはこの「足るを知る」である。『老子』には第33章、第44章、第46章の3ヶ所に「足るを知る」が出てくる。

第33章には、「足るを知る者は富み、強(つと)めて行なう者は志有り」と出てくる。(持っているものだけで)満足することを知るのが富んでいることであり、自分をはげまして行動するものがその志すところを得るという意味である。しかし、森(1978)は、この章に出てくる、‘「足るを知る者は富む」という言葉は前後の句とはあまり必然的なつながりはない。あるいは昔からあった格言であったのかもしれない’と指摘している³。

第44章には、「足ることを知れば辱(はずか)しめあらず、止(とど)まることを知れば殆(あや)うからず。以(もつ)て長久なる可(べ)し」と出てくる。(どの程度で)満足すべきかを知れば、屈辱を免れ、(どこで)とどまるべきかを知れば、危険に出あわないという意味である。この章で老子は名声欲の否定をしている。‘老子には生きることを尊び、長生を望ましいとする思想があるといわれる。生存ということが人間にとって本質的なものである以上、これは当然のことである。そのためには生命の自然に反する欲望を去る必要が生まれると老子は考えている’と森は解説している⁴。

第46章には、「禍(わざわい)は足るを知らざるより大なるは莫く、咎(とが)は得んことを欲するより大なるは莫し」と出てくる。満足すること知らないほど大きな災いはなく、(他人のもちものを)ほしがることほど大きな不幸はないという意味である。この章では前半に戦争のことを述べており、老子が生まれたのは春秋時代であり、当時の中国は様々な勢力があり、争いもたびたび起きていたようなので、その物欲は領土欲を特に意識しているのかもしれない。

② 仏教

仏教にもいくつかの經典に「足るを知る」が出てくる。よく知られているのは『遺教經』^{ゆいきょうぎょう}であり、ここでは『遺教經』の「足るを知る」について説明する。

遺教經には、「比丘達よ、もし諸々の苦悩から脱却せんと思うならば、よく知足（の教え）を觀じよ。「知足」という教えは豊かで安樂、安穩なるものである。足ることを知る人は、地面で寝るような暮らしを送っていても、なお安樂である。足ることを知らない者は、豪勢豪奢な家で暮らしていたとしても、まだ満足がいかない。足ることを知らない者は、裕福であっても（心が）貧しい。足ることを知る人は、貧しくとも（心が）豊かである。足ることを知らない者は、常に（モノ・音・臭い・味・肌触りに対する）五つの欲望に振り回され、足ることを知る者の憐（あわ）れまれる。これを知足と名づける。」と出てくる。遺教經は仏教の祖である釈迦の最後の説法であり、根幹には、「八大人覺」^{はちだいにんがく}という悟りを得るためにたもつべき八つの条件・意識があり、「知足」はその中の一つでもある。

遺教經にはさらに、「欲することを少なくすること」という意味の「少欲」という言葉があり、この「少欲」は八大人覺の一つでもある。この「少欲」と「知足」を合わせた「少欲知足」という四字熟語もある。「あまり、いろいろな物を欲しがらず、現在の状態で満足すること。欲望を全て、消してしまうのではなく、欲張らないで、与えられた現実を素直に受け入れること。」という意味である。

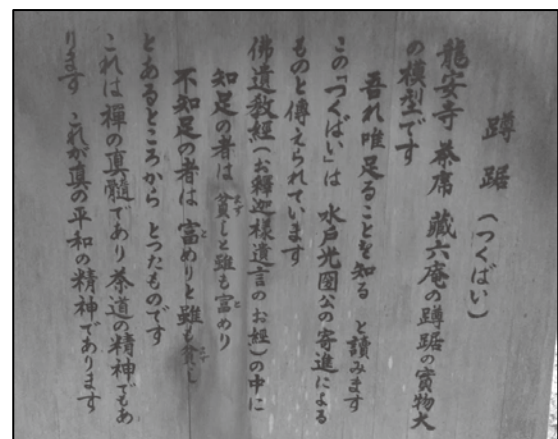
③ 徳川光圀

京都の龍安寺には徳川光圀が寄進したとされる、「知足の蹲踞（補・図4）」というものがある。蹲踞とは茶室に入る前に手や口を清めるための手水を張っておく石のことである。丸い石の造形物の真ん中に、四角があり、その周りに、五、住、止、矢の4文字が彫られている。おもしろいのは、この4文字に真ん中の四角、つまり「口」という字を足すと、それぞれ吾、唯、足、知という字に代わるということである。もちろん、その意味は字のごとく「吾唯足るを知る」という意味である。その意味合いから石庭の石が「一度に14個しか見ることができない」ことを「不満に思わず満足する心を持ちなさい」という戒めでもあるといわれる。また、徳川光圀は「九分は足らず 十分はこぼれると知るべし」という言葉を残している。九分目では足りないと思い、十分まで求めようとすれば、（水は）こぼれてしまうということであり、人に欲があるのは仕方がないが、際限なく求めることは危険だという意味である。

<補・図4>知足の蹲踞



<補・図5>龍安寺の蹲踞の説明文



④ 森鷗外の『高瀬舟』

森鷗外の書いた小説、『高瀬舟』は、財産の多少と欲望の関係、および安楽死の是非をテーマとしている。ここでは小説のあらすじを簡潔に紹介したい。京都の罪人を遠島に送るために高瀬川を下る舟に、弟を殺した喜助という男が乗せられた。護送役の同心である羽田庄兵衛は、喜助がいかに晴れやかな顔をしている事を不審に思い、訳を尋ねる。庄兵衛は喜助になぜそのように晴れやかな表情をしているのかを尋ねると、喜助は苦しい生活から一転、皮肉にも罪人となることで、食事をもらえるようになり、流刑先での生活費までももらえるようになり、晴れ晴れとしている。あの極貧生活に比べれば、十分すぎるほどの待遇をしてもらっていると答える。満足している様子に、船守りの庄兵衛は、「足るを知る」境地にいるような喜助に、人生というものを考えさせられる。その考えが高瀬舟の本文には、「庄兵衛はただ漠然と、人の一生というような事を思ってみた。人は身に病があると、この病がなかったらと思う。その日その日の食がないと、食ってゆかれたらと思う。万一の時に備えるたくわえがないと、少しでもたくわえがあったらと思う。たくわえがあっても、またそのたくわえがもっと多かったらと思う。かくのごとくに先から先へと考えてみれば、人はどこまで行って踏み止まることができるものやわからない。」と出てくる。

このように高瀬舟には、「足るを知る」という言葉は出てこないが、その考え方は出てくる。文豪森鷗外が我々に残したかった大きなメッセージだったと受け取りたい。

補.1.3 杯の構造と原理

以下の＜補・図6＞を見ると、飾りの内部に通っている管の曲がっている部分が、器の八分目になるように作られている。この八分目の曲がっている部分より多く液体を注ぐと、後述するサイフォンの原理が作用して、すべての液体がこぼれてしまう仕組みになっている。

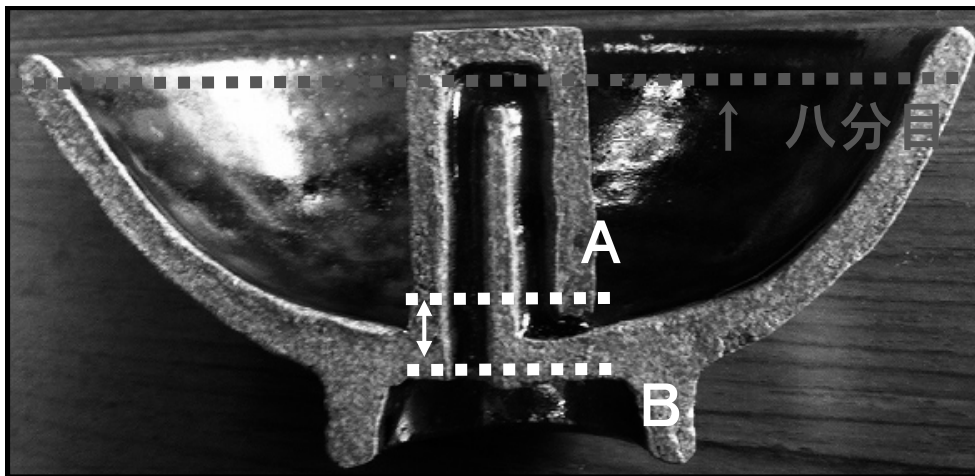
そのサイフォンの原理について、簡単に述べたい。＜補・図6＞で、管の入り口Aと出口Bの高さには少し差がある。水は“高低差”があると、低い方へ流れる性質があるので水は出口へと移動していく。私たちの実験を通して分かったことだが、水がいっぱい入ったストローを＜補・図6＞のように逆さまにしてみた。面白い結果が出た。ストローの両断面AとBの地面からの高さが同じときは不思議なことに水はどちらからも落ちなかった。しかし、AとBのバランスが少しでも崩れると、ストローの全ての水は低い方から全部落ちるのである。つまり、十分杯の管の構造と同じなのである。

もう一つ大事なのは、なぜ、Aから入った水が管の頂点まで逆流することができるかということである。水は高いところから低いところへ移動するのが自然の法則であるが、これは真逆である。その理由は圧力差にある。まず、8分目まで注ぐと、管の中も8分目までは酒が入る。それ以上注ぐと、管の頂点まで酒がいっぱいになり、頂点にあった酒は下に落ちる。これによって落ちてなくなった酒の分だけ管の外の酒がAを通して管の中に入る。その際、管の外より管の中は細いためより圧力がかかる。つまり、同じ杯の中でも管の中と外で圧力の違いが生じるのである。この圧力の違いによって酒は圧力が低いところから高いところへ移動するのである。

ただ、この原理については、専門家の間でも異なる主張がある。従来の「大気圧説」の他に、「水分子の鎖説」、「圧力差説」なども提唱されている。詳しくは2014年度の権ゼミ

ナールの報告書を参照されたい。

<補・図 6> 十分杯の断面図



(資料) 長岡在住の陶芸作家の岡崎宗男氏が製作したもの

補. 1. 4 十分杯という名称

私たちが広報活動で質問されるのが「十分杯」という名前についてである。具体的には、
‘「八分の杯」ではないか’ という質問である。その際に私たちは決まって『十分杯銘』を
取り上げ 3 代藩主が十分杯と命名していることを伝えてきた。しかし、3 代藩主がなぜ、
八分ではなく、十分としたかはわからない。ここでは、それについて推測の域を出ないが、
推理してみたい。

もともと「十分」は同じ発音で「充分」という単語がある。「十分」は‘10割、100%’の意味があり、「充分」は‘必要なだけ’、‘enough’、‘not too much’の意味が込められている。つまり、「充分」は必ず100%でなくてもその人がいいと思うのであればそれでいいという意味がある。

そうすると、発音は「十分」から、意味は「充分」からとったのではないかと推論している。つまり、十分杯は教訓がある杯であるが、その教訓とは自身にとっての「充分」を理解することなのである。

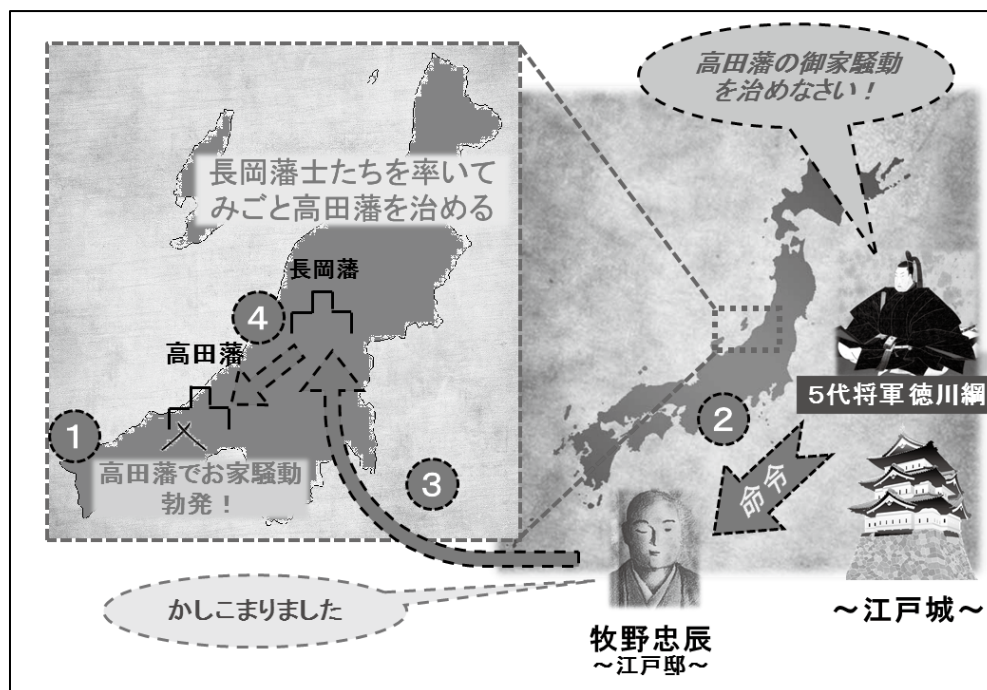
補. 1. 5 長岡と十分杯の関わり

補. 1. 5. 1 江戸時代

最初に、<補・図 7>は、十分杯と長岡との関わりを年表にしたものである。江戸と長岡に分けたのは、江戸からの影響を見るためである。以下では、十分杯と長岡がどういった関係なのかを江戸時代と近現代に分けて説明する。まず江戸時代の十分杯と長岡の関わりについて説明する。十分杯は、江戸時代以降の長岡藩との関わりが深かったと推定される。今から約400年昔、長岡藩が開府する。長岡藩の財政は、開府当時、表高は年間7万4千石だったと言われていた。しかし、その後の新田開発や検地などにより、実際はその約2倍の14万27百石であることがわかった。開府してからしばらくの間の財政状況はかなり余裕だったと推定される(蒲原・坂本(1980)p.89)。そういった時に、高田藩で越後騒動⁶が勃発する。

1681 年、長岡藩の三代藩主牧野忠辰に高田城二ノ丸請収^{せいしゅう}、そして、それに伴う高田藩の運営の命が下る（＜補・図 8＞参照）。当時、江戸の長岡藩邸にいた彼は、急ぎ長岡へ戻り、高田に出兵した。この出兵は長岡藩にとって財政的には大きな負担となった。このことに加え、長岡ではこの頃、水害⁷が多かったようである。ちなみに、江戸時代を通して長岡城まで浸水する事が 7 回もあったと言われている。中小の氾濫を含めるとかなりの回数に及び、6 万 6 千石強の損害になったこともあったようである（長岡市史編集委員会近世史部会(1992)p.34-35）。主に、高田藩の請収、それに伴う高田藩の管理運営、度重なる水害、以上の 3 つの事が原因で、開府当時は余裕だった財政も厳しくなっていた。ちょうどその頃、大阪から戻った領民が長岡に十分杯を持ち込み、忠辰が知るところとなった。忠辰は、三河⁸からの「儉約」「戒め」といった精神を持っていた。そして、十分杯には、この精神に似た「足るを知る」という精神が込められている。これが、忠辰の心に響いたのではないだろうか。忠辰は、十分杯に『銘』という形で言葉を残した。

＜補・図 7＞越後騒動における関係図



補 1.5.2 明治時代以降

次に、近現代の十分杯と長岡の関係を説明する。時代が下って、1906 年、長岡市が誕生する。そして、長岡市の初代市長に牧野家の 14 代目の当主、牧野忠篤が就任する。戊辰戦争に敗れ、長岡は焼け野原となっていた。如何にして長岡の復興と近代都市への発展を実現するか。この苦境に、彼は歴代の藩主たちの教を深く心に刻んで臨んだ。彼は、明治時代の日本を代表する陶芸家の宮川香山^{みやがわこうざん}に、十分杯の作成を依頼し、この十分杯に込められた精神を座右の銘として、事に臨んだのである。そして、忠篤は十分杯を貴族に配ったようである。以降、長岡では、事の節目や、記念品として十分杯を配る事が文化の一つになった。例えば、

- ・阪之上小学校の 100 周年記念で配られた「鳩」の十分杯
- ・長岡高校の 140 周年記念で、同窓会で配られた「龍」の十分杯

補・図8>十分杯と長岡に関する年表



補論． 2 日本酒チャートづくり

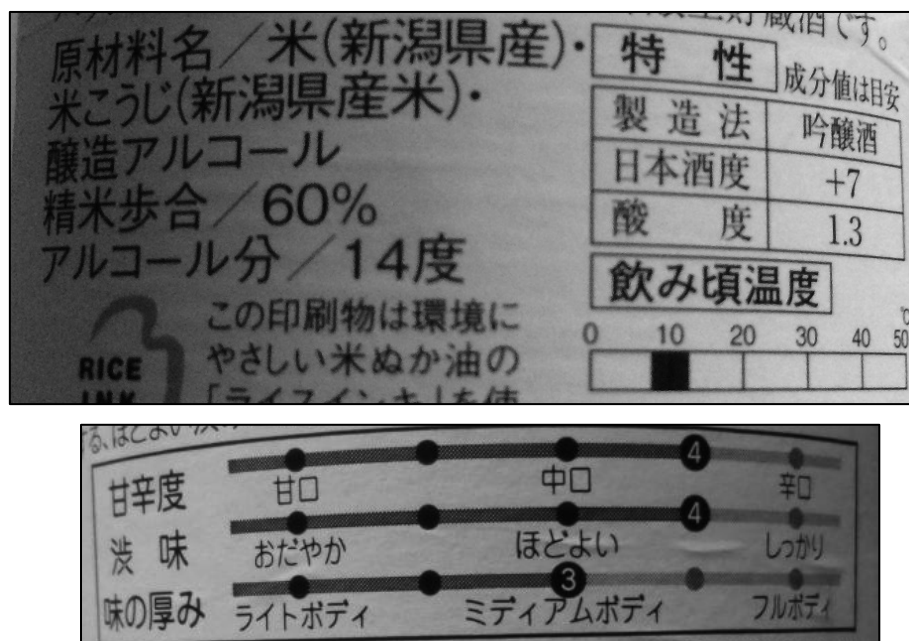
日本酒チャート作りとは、長岡市の各酒蔵の日本酒をそれぞれ、一般の方に飲みくらべてもらい、味を評価してもらうものである。最終的に味や香りについての評価を、十字方向に表したチャート表を作成することで、純粋な消費者の感想のみに基づく日本酒の分類を試みるものである。

これまで、ゼミ生の実体験として日本酒のラベル表示を見ると「精米歩合」「日本酒度」といったあまりなじみのない数値、や「純米酒」と「特別純米酒」、「吟醸酒」と「吟醸造り」など一見ただけで違いが分かりにくい場面に、多々遭遇してきた。それは、同じ酒類のワインが1軸の指標で端的に表されているのとは対照的に感じられた。さらに、十分杯の活動で、「日本酒を選びたいけど数が多くて選べない」、「自分に合う日本酒が見つからない」というお言葉を多く耳にしてきた。このことから、「日本酒の表示が分かりにくい」という悩みは、多くの人に共通の悩みなのかもしれないと思うようになった。そこで、何名かの酒蔵関係者と相談した結果、「消費者の感想に基づくチャート表」を作成することで、酒造業自体や小売業、観光業など多方面で長岡のために活用できるのではないかと考え、この活動を立ち上げた。

今のところ、2回のイベントを通じて長岡市内16蔵のうち、15蔵分の試飲調査を終えており、どのように取りまとめるかを検討中である。

なお、本取り組みは内田エネルギー科学振興財団より後援を受け、各イベント等を展開している。

<補・図9> 日本酒のラベル表示例（上）とワインのラベル表示例（下）



補論. 3 十分杯の広報活動用 新・はっぴづくり

今年度の長岡大学ヒューマンパワーアッププロジェクト（通称 HPP）にゼミメンバーが「チーム十分杯」として応募した。HPP は本学学生が個人、または団体が主体的に取り組む事業について、審査を経て有意義と認められた場合に大学から資金援助をするものである。

チーム十分杯では、「思わず記念撮影がしたくなる“十分杯 PR 衣装”作り」と題して、新しいデザインのはっぴとのおぼり旗を作ることを企画・申請した。従来、広報活動においては本学所有のはっぴを使用していたため、一見しただけでは十分杯の広報をしているとは分らなかった。そこで、背中に十分杯そのものをデザインし、襟元に長岡大学の文字を入れることで、「十分杯」「長岡大学」どちらも知ってもらえるような工夫を施した。また、両腕の上腕部に長岡藩ゆかりのデザインである「五間梯子」を取り入れ、長岡らしさを強くアピールできるようにした。

新しいはっぴは、10 月半ば頃から広報活動にて使用しており、多くの方から好評を頂いている。

＜補・図 10＞新しいデザインのはっぴ



参考文献

- 朝尾直弘他（1994）『日本通史 第13巻 近世3』岩波書店
- 内山弘（2016）『長岡鉄工業の歩み』長岡歯車資料館
- 小田切宏之（2010）『企業経済学 第2版』東洋経済新報社
- 蒲原拓三、坂本辰之助（1980）『長岡藩史話』歴史図書社
- 国史大辞典編集委員会（1990）『国史大辞典 第11巻』吉川弘文館 p.874
- 権五景（2016）『先進国になるための必要条件と十分条件-新潟県長岡市の機械工業の事例を通じて-』長岡大学地域連携研究センター
- 塚本 学（1998）『徳川綱吉』日本歴史学会
- 長岡市史編集委員会近世史部会（1992）『長岡藩政資料集（4）長岡平蔵収集長岡藩資料』長岡市
- 日置栄継（2010）『新・国史大年表 第五巻 - I（一六〇一～一七一五）』国書刊行会 p.649、p.709
- 深井雅海（2012）『日本近世の歴史3 綱吉と吉宗』吉川弘文館
- 松本和明（2001）『田村文四郎の企業者活動と北越製紙の設立』長岡短期大学生涯学習センター
- 森鷗外（2002）『山椒大夫・高瀬舟 他四編』岩波文庫緑 5-7
- 森三樹三郎（1978）『老子・荘子 人類の知的遺産5』講談社

参考ウェブサイト

- ・「江戸時代の貨幣価値と物価表-Teio コレクション」
<http://www.teiocollection.com/kakaku.htm>（2016.1.10 時点）
- ・「経営戦略の基本(2).PPM 分析-協同組合京都府中小企業診断士会」
<http://www.kcs-net.or.jp/koza/1-3.htm>（2017.1.24 時点）
- ・「バルとは？-街バルジャパン」
<https://machi-bar.jp/whatisbar>（2017.1.23 時点）

1 長岡の機械工業の歴史については、内山（2016）、権（2016）を参照されたい。

2 この経緯については松本（2001）が詳しい。

3 森（1978）p.138

4 森（1978）p.31

5 少欲（欲をわずかにす）、知足（足るを知る）、楽寂静（寂静を楽[ねが]う）、勤精進（精進を勤める）、不忘念（念を忘れず）、修禅定（禅定を修める）、修智慧（智慧を修める）、不戯論（戯論せず）の八つ。なお、八大人覺の概念自体は、別の經典（『長阿含經』『阿那律八念經』等多数）にも見ることが出来るが、その内容は、それぞれ相違する場合がある。

6 越後騒動・・・高田藩にて起った御家騒動。藩の政治を執っていた「小栗美作」と、これに敵対する重臣とが争い、徳川五代目将軍綱吉の裁定で両派に厳しい処分が下され、高田藩は幕府に没収された。没収に際し、高田城の受け取りの役を命じられたのが牧野忠辰であった。

7 水害・・・信濃川は暴れ川と言われており、治水技術の発達していない当時は多くの水害があった。寛文十年（1670年）から嘉永四年（1851年）までの約180年間で52回の水害が記録されている。これは単純計算で、3年半に1回の水害が起きている事になる。

8 三河・・・三河国^{みかわのくに}は、現在の愛知県東部にあたる。牧野家は三河出身である。

長岡大学 学生による地域活性化プログラム 各プロジェクト報告書

1. 十分杯で長岡を盛り上げよう！ ～十分杯を、地域から愛される“問題児”に！？～
権 五景ゼミナール
2. 企業ホームページの改善による効果の確認
村山光博ゼミナール
3. 未来の農業革新Ⅲ ～地産地消を通じた循環型社会への貢献～
橋長真紀子ゼミナール
4. 地域の文化と伝統をつなぐ ～高橋九郎生誕 165 周年を記念する活動～
高橋治道ゼミナール
5. 長岡周辺地域の温泉資源の現状分析と情報発信 ～温泉☆ドキドキプロジェクト～
山川智子ゼミナール
6. グラスルーツグローバリゼーション ～草の根・地域からの地球一体化・人類一体化推進～
広田秀樹ゼミナール
7. 酒粕で長岡を盛り上げよう！ ～地域資源としての酒粕の可能性を探る～
権 五景ゼミナール
8. 「まちの駅」をフィールドとした活動等による地域活性化への貢献
鯉江康正ゼミナール

平成28年度 学生による地域活性化プログラム 権五景ゼミナール活動報告書

【発行日】 平成29年 3 月22日
【発行人】 村山 光博
【発 行】 長岡大学 地域活性化プログラム推進室
〒940-0828 新潟県長岡市御山町80-8
T E L 0258-39-1600 (代)
F A X 0258-39-9566
<http://www.nagaokauniv.ac.jp/>